

國譯緇門寶藏集卷之下

十四 學道は須らく直截の一路に參得することを要すべし

徳山宣鑑禪師、出世して、凡そ僧の門に入るを見ては便ち棒す。

臨濟義玄禪師、出世して、凡そ僧の門に入るを見ては便ち喝す。

大惠、人に示す法語の略に云く、「但々平昔坐禪の處に得る底、經教を看る處に得る底、語録上に記得する底、宗師の口頭言下に領覽し得る底を將て、一時に他方世界に掃向して、卻つて緩々地に子細に看よ。他の徳山、何が故ぞ、僧の門に入ると見ては便ち棒す、臨濟何が故ぞ、僧の門に入るを見ては便ち喝す。若し二大老の用處を識らば、日用境に觸れ縁に逢ふ處に於て、世諦流布を作さず。亦佛法の理論を作さず。既に此の二邊に著せず、須らく知るべし、自ら一條の活路あることを。」

秘魔岩和尚、常に一木叉を持して、僧の來りて禮拜するを見る毎に、即ち頭を叉卻して曰く、「那箇の魔魅か汝をして出家せしむ。那箇の魔魅か汝をして行脚せしむ。道ひ得るも也た又下に死す、道ひ得ざるも也た又下に死す。速かに道へ速かに道へ。」學徒、對ふる者あること鮮し。(會元)

慈明和尚、室中に劍一口を挿し、草鞋一對、水一盆を以て劍邊に置在す。入室するを見る毎に即ち

曰く、「看よ看よ。」劍邊に至りて擬議する者あれば、師曰く、「喪身失命し了れり。」便ち喝出す。(會元)

紫胡和尚、山門に一牌を立つ、牌中字あり、云く、「紫胡に一狗あり、上は人の頭を取り、中は人の腰を取り、下は人の脚を取る、擬議せば喪身失命す」と。凡そ新到を見ては、便ち喝して云く、「狗を看よ。」僧纒かに首を回せば、紫胡便ち方丈に歸る。(碧巖)

佛鑑勲禪師、室中に木穀子六隻を以て、面々皆么の字を書す。僧纒かに入る。師擲つて曰く、「會す麼。」僧擬不擬す。師即ち打出す。(會元)

●木穀子。博奕の采、すころくのさい。

晦堂心禪師、室中常に拳を擧す。僧に問うて曰く、「喚んで拳頭と作すときは觸る、喚んで拳頭と作さざるときは背く、喚んで甚麼とか作さん。」

大惠禪師、室中常に竹篋を擧す、僧に問うて曰く、「喚んで竹篋と作すときは觸る、喚んで竹篋と作さざるときは背く、下語することを得ず、無語なることを得ず、速かに道へ、速かに道へ。」

香嚴和尚、衆に示して曰く、「若し此の事を論せば、人の樹に上るが如し。口に樹枝を銜み、脚枝を踏ます、手枝を攀ぢす、樹下に忽ち人ありて問はん。「如何なるか是れ祖師西來意」と。他に對へざれば又他の所問に違す、若し他に對ふれば又喪身失命す。恁麼の時に當つて作麼生か即ち得ん。」

芭蕉清禪師、衆に示して曰く、「爾に拄杖子あらば、我れ爾に拄杖子を與へん。爾に拄杖子なくんば我れ爾が拄杖子を奪はん。」

開善謙禪師曰く、「山僧尋常道ふ、行住坐臥決定して不_レ是、見聞覺知決定して不_レ是、思量分別決定して不_レ是、語言問答決定して不_レ是。試みに此の四個の路頭を絶_レ却して看よ、若し絶_レせずんば決定して悟_レらず。此の四個の路頭若し絶_レせば、僧、趙州に問ふ、「狗子に還_レつて佛性ありや、也た無_レや。」趙州云く、「無_レ。」如何なるか是れ佛。」雲門道く、「乾屎橛。」管取して呵々大笑せん。」(羅湖野錄)

楊岐和尚、室中僧に問ふ、「栗棘蓬_レ作_レ麼生か呑まん。金剛圈_レ作_レ麼生か透らん。」

大惠禪師、室中僧に問ふ、「不_レ是_レ心、不_レ是_レ佛、不_レ是_レ物、是_レ箇_レの作_レ麼。」

石頭和尚曰く、「恁麼も也た得_レず、不_レ恁麼も也た得_レず。恁麼不_レ恁麼、總に得_レず、子作_レ麼生。」

羅山和尚曰く、「會_レす麼、是_レ禪にあら_レず、是_レれ道にあら_レず、是_レれ佛にあら_レず、是_レれ法にあら_レず。是_レれ甚_レ麼ぞ。」

古徳曰く、「此の事は有心を以て求む可_レらず、無_レ心を以て得_レべから_レず、語言を以て造るべから_レず、寂黙を以て通_レすべから_レず。」大惠曰く、「此れは是_レれ第一等_レの泥に入り水に入る

老婆の説話なり。往々に參禪の人、只々恁麼に念過して、殊に子細に是れ甚_レの道理ぞと看_レず。」(大惠書)

十五 學道は須らく泥に入り水に入る老婆の説話を知_レることを要すべし

雲門大師曰く、「古人大いに葛藤相爲にするの處あり。祇雪峰和尚の道ふが如くんば、盡大地是_レれ

◎泥に入り云々、田夫野人の言に同じ。

圓悟禪師曰く、「古來大いに眉毛を惜_レます人の爲に指出する處あり。雲門は觀體全眞、臨濟は報化佛頭を坐斷す。徳山は心に無_レ事に、心に於て無_レ事なれば、虚にして靈に、寂にして照なり。巖頭は只只間々地を守る、一切時中無_レ欲無_レ依なれば、自然に諸三昧を超_レゆ。趙州道く、「我百千個の漢子を見るに、只是れ作佛を覓_レむる底、中間、個の無_レ心の道人を覓_レむるに得_レがたし。但々熟々其の言を味_レふて心を休して履踐せよ、他時異日、境に逢_レひ縁に遇_レふて乃ち力を得_レん。」(心要)

魏府の老華嚴、示衆の語に曰く、「佛法は個が日用の處に在り、個が行住坐臥の處、喫茶喫飯の處、語言相問の處、所作所爲の處に在り。若し舉_レ心動念すれば、又卻つて不_レ是_レなり。還_レつて會_レす麼。個若し會_レ得_レせば、即ち是れ擔枷帶鎖重罪の人なり。」

雪峰存禪師、衆に示して曰く、「一々蓋天蓋地、更に玄と説き妙と説かず、亦心と説き性と説かず、突然として獨露す。大火聚の如く、之に近づくときは面門を燎_レ卻す。太阿の劍に似て之に擬するときは、喪身失命す。若し也た佇思停機せば、干渉を沒_レす。」(碧巖)

雲門大師曰く、「汝若し相當り去らば且く個の入路を覓_レめよ。微塵の諸佛、個が脚跟下に在り。三藏

の聖教、爾が舌頭上に在り。如かず悟り去つて好からんには。」

大惠禪師曰く、「龍の半蓋の水を得て、便ち能く雲を興し霧を吐いて、大雨を降霖するが如し。那裏か祇管大海の裏に去りて、輓じて我に許多の水ありと謂はん。」

大惠曰く、「爾但々心念を灰卻し來りて看よ、灰し來り灰し去りて、蕪然として冷灰に一粒の豆、爐外に爆在せよ、便ち是れ沒事の人ならん。」

大惠曰く、「我が這裏日を逐ふて長へに進む底の禪なし。遂に彈指一下して云く、若し會し去らば便ち罷參。」(武庫)

佛曰く、「定法の阿耨多羅三藐三菩提と名づくるもの有ることなし。亦定法として如來の説く可きもの有ることなし。」

臨濟和尚曰く、「我れに一法の人に與ふるなし、只是れ病を治し縛を解す。」

徳山和尚曰く、「我宗に語句なし、實に一法の人に與ふるなし。」

大惠禪師曰く、「此の事若し一毫毛の工夫を用ひて取證せば、人の手を以て虚空を撮磨するが如し、只益々自ら勞するのみ。」又曰く、「心意識を以て領會を容れず。」

臨濟和尚曰く、「物と拘はらず、脱體現成。」

①輓、めぐらすなり。
②阿耨多羅三藐三菩提。(Anuttara-samyak-sambodhi) の音寫、無上正徧智と譯す、佛陀の智徳を稱する一名號にして、佛は絕對智者にして其智を超えて、大なるものなきが故に無上といひ、萬有の一一を悟了せざるなきを以て、正徧智といふ。佛敎大師の歌に「あのかたらしきみやくさばちのほとけたち、我たつそまに瞑加あらせたまへ」とあり、古今集に見えて古來の相傳とすといふ。

地藏琛和尚曰く、「若し佛法を論せば一切現成。」

眞淨和尚曰く、「一切現成、更に誰をしてか會せしめん。」

十六 學道は須らく向上の一路を洞明することを要すべし

趙州和尚曰く、「因に僧問ふ、「狗子に還つて佛性ありや、也た無きや。」州云く、「無。」

趙州因に僧、婆子に問ふ、「臺山の路甚處に向つてか去る。」婆云く、「葛直に去れ。」僧纒かに行くこと三五歩。婆云く、「好箇の師僧、又恁麼に去れ。」後に僧あり州に舉似す。州云く、「我去りて爾が這の婆子を勘過せんを待つて、明日便ち去りて亦是くの如く問ふ。婆も亦是くの如く答ふ。」州歸りて衆に謂つて云く、「臺山の婆子、我爾が與に勘破し了れり。」

趙州、一庵主の處に到りて問ふ、「有り麼有り麼。」主、拳頭を豎起す。師曰く、「水淺くして是れ船を泊むる處にあらず」と云つて、便ち行く。又一庵主の處に到りて問ふ、「有り麼有り麼。」主亦拳頭を豎起す。師曰く、「能縦能奪能殺能活」と云つて便ち作禮す。

僧、清平和尚に問ふ、「如何なるか是れ大乘。」曰く、「井索如何なるか是れ小乘。」曰く、「鐵索。」如何なるか是れ有漏。」曰く、「箴籬。」如何なるか「是れ無漏。」曰く、「木杓。」

南泉和尚、因に東西兩堂、猫兒を爭ふ。泉乃ち提起して云く、「大衆道ひ得ば即ち救はん、道ひ得ず

謂つて云く、「臺山の婆子、我爾が與に勘破し了れり。」

趙州、一庵主の處に到りて問ふ、「有り麼有り麼。」主、拳頭を豎起す。師曰く、「水淺くして是れ船を泊むる處にあらず」と云つて、便ち行く。又一庵主の處に到りて問ふ、「有り麼有り麼。」主亦拳頭を豎起す。師曰く、「能縦能奪能殺能活」と云つて便ち作禮す。

僧、清平和尚に問ふ、「如何なるか是れ大乘。」曰く、「井索如何なるか是れ小乘。」曰く、「鐵索。」如何なるか是れ有漏。」曰く、「箴籬。」如何なるか「是れ無漏。」曰く、「木杓。」

南泉和尚、因に東西兩堂、猫兒を爭ふ。泉乃ち提起して云く、「大衆道ひ得ば即ち救はん、道ひ得ず

謂つて云く、「臺山の婆子、我爾が與に勘破し了れり。」

趙州、一庵主の處に到りて問ふ、「有り麼有り麼。」主、拳頭を豎起す。師曰く、「水淺くして是れ船を泊むる處にあらず」と云つて、便ち行く。又一庵主の處に到りて問ふ、「有り麼有り麼。」主亦拳頭を豎起す。師曰く、「能縦能奪能殺能活」と云つて便ち作禮す。

僧、清平和尚に問ふ、「如何なるか是れ大乘。」曰く、「井索如何なるか是れ小乘。」曰く、「鐵索。」如何なるか是れ有漏。」曰く、「箴籬。」如何なるか「是れ無漏。」曰く、「木杓。」

南泉和尚、因に東西兩堂、猫兒を爭ふ。泉乃ち提起して云く、「大衆道ひ得ば即ち救はん、道ひ得ず

③井索は井戸の釣瓶繩なり、鐵索は鐵索なり、箴籬は竹などにて作るまがき也。

んば即ち斬却せん。衆對ふるものなし。泉遂に之を斬る。晩に趙州外より歸る。泉、州に舉似す。州乃ち履を脱いで頭上に安じて出づ。泉云く、「子若し在りしならば、即ち猫兒を救ひ得ん。」

洞山和尚、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」山云く、「麻三斤。」

雲門大師、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」門云く、「乾屎橛。」

楊岐和尚、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」岐云く、「三脚の驢子、蹄を弄して行く。」

僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ佛。」州云く、「殿裏底。」

龐居士馬祖に問ふ、「萬法と侶たらす、是れ什麼の人ぞ。」祖云く、「爾が一口に西江水を吸盡するを待つて、即ち汝に向つて道はん。」士豁然として大悟。頰を作りて曰く、「十方同聚會、箇々學無爲、此は是れ還佛場、心空及第して歸る。」と。

僧、巖頭和尚に問ふ、「古帆未だ掛けざる時如何。」師曰く、「小魚、大魚を呑む。」又僧前の如く問ふ。

師曰く、「後園の驢、草を喫す。」

大瀧安和尚曰く、「有句無句は藤の樹に倚るが如し。」疎山問ふ、「忽ち樹倒れ藤枯るゝに遇ふ時如何。」師、呵々大笑して方丈に歸る。

寶樹和尚開堂して曰く、「三聖、一僧を推出す。師便ち打す。聖曰く、「與麼に人の爲にせば、但々這の僧の眼を瞎却するのみに非ず。鎮州一城の人の眼を瞎却し去ること存らん。」法眼云く、「甚麼の處か

是れ人の眼を瞎却する處ぞ。」師、拄杖を擲却して便ち方丈に歸る。」

三聖和尚上堂、我れ人に逢ふときは出づ、出づるときは人の爲にせず。興化曰く、「我れ人に逢ふときは出でず、出づるときは便ち人の爲にす。」と。

十七 學道は須らく噴地の契券を領會することを要すべし

臨濟三度、黄檗に佛法的々の大意を問うて、三度打せらる。遂に大愚の處に到りて有過無過を問ふ。愚曰く、「黄檗與麼に老婆心切なり、汝が爲に微困なることを得、更に這裏に來りて、有過無過と問ふ。」師、言下に於て大悟す。乃ち曰く、「元來、黄檗の佛法多子なし。」と。

興化、大覺に到りて院主と爲る。一日覺、院主と喚ぶ。「我れ聞く、爾道ふ南方に向つて行脚一遭す、拄杖頭會て一個の佛法を會する底を撥著せずと、爾個の甚麼の道理に憑りてか、與麼に道ふ。」師便ち喝す。覺便ち打す。師又喝す。覺又打す。師來日、法堂より過ぐ。覺、院主と召す。「我れ直下に爾が昨日の這の兩喝を疑ふ。」師又喝す。覺又打す。師再び喝す。覺又打す。師曰く、「某甲、三聖師兄の處に於て個の賓主の句を學得す、總に師兄に折倒し了らる。願はくは某甲に個の安樂の法門を與へよ。」

覺曰く、「這の瞎漢、這裏に來りて敗闕を納る、納衣を脱下して痛く打すること一頓せん。」師、言下に於て臨濟先師、黄檗の處に於て棒を喫する底の道理を薦得す。

歸靜禪師初め西院に參す。便ち問ふ、「問はんと擬して問はざるるとき如何。」院便ち打す、師良久す。

院曰く、「若し喚んで棒と作さば眉鬚墮落せん。」師、言下に於て大悟す。

僧、趙州に問ふ、「學人乍入叢林、乞ふ師指示せよ。」師云く、「喫飯了也。」僧云く、「喫飯了。」州云く、「鉢盂を洗ひ去れ。」這の僧豁然として大悟。後來雲門大師拈じて云く、「且く道へ、指示あるか、指示なきか。若し有りと言はゞ趙州他に向つて甚麼とか道はん、若し無しと言はゞ、這の僧、甚としてか悟り去る。」

高亭簡禪師、徳山に參す。江を隔て、纔かに見て便ち云ふ、「不審。」山乃ち扇を搯して之を招く。師忽ち開悟す。乃ち横に趨り去る、更に回顧せず。

鳥窠道林禪師、因に侍者會通禮辭して曰く、「某甲法の爲に出家す、和尚慈誨を垂れず、今諸方に往いて佛法を學び去らん。」師云く、「若し是れ佛法ならば、吾が此の間にも亦少許あり。」曰く、「如何なるか是れ和尚、此の間の佛法。」師、身上に於て布毛を拈起して之を吹く。侍者大悟す。

龍潭信禪師、一日天皇に問うて曰く、「某、到來してより必要を指示することを蒙らず。」皇曰く、「汝到來してより、吾れ未だ嘗て汝に必要を指さざるにあらず。」師曰く、「何處か指示する。」皇曰く、「汝茶を撃し來れば、吾れ汝が爲に接す。汝、食を行じ來れば、吾れ汝が爲に受く。汝和南するときは、吾れ便ち低首す、何處か必要を指示せざる。」師低頭良久す。皇曰く、「見は直下に便ち見よ、擬思せば即ち差ふ。」師當下に開解す。復た問ふ、「如何なるか保任せん。」皇曰く、「性に任せて逍遙し、縁に隨つて。」

●放曠たり、但凡心を盡せ、別に聖解なし。
僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の柏樹子。」僧云く、「和尚境を將て人に示す莫れ。」州云く、「我れ境を以て人に示さず。」僧云く、「既に境を將て人に示さずんば、卻つて如何なるか是れ祖師西來意。」州只云く、「庭前の柏樹子。」其の僧、言下に於て忽然として大悟す。(傳燈會元等大今大意法語に依りて之を記す。)

葉縣省和尚、因に僧、趙州柏樹子の話を請益す。省曰く、「我れ汝が與に説くことを辭せず、還つて信せんや。」云く、「和尚の重言争でか敢て信せざらん。」曰く、「汝還つて簷頭の雨滴聲を聞く麼。」其の僧豁然として覺せず、失聲して曰く、「一囉。」省曰く、「汝箇の甚麼の道理をか見る。」僧便ち頷を以て對へて云く、「簷頭の雨滴、分明に瀝々、乾坤を打破して、當下に心息む。」省忻然たり。

洞山初禪師、初め雲門に參す。門問ふ、「近離甚の處ぞ。」師曰く、「查渡。」門曰く、「夏、甚の處にか在る。」師曰く、「湖南の報慈。」門曰く、「幾時か彼を離る。」師曰く、「八月二十五。」門曰く、「汝に三頓の棒を放す。」師、明日に至つて卻つて上りて問訊す。昨日和尚の三頓の棒を放つことを蒙る。知らず過甚麼の處にか在る。門曰く、「飯袋子、江西湖南に恁麼にし去る。」師、言下に於て大悟す。遂に曰く、「他後、人煙なき處に向つて、一粒米を蓄へず、

- 放曠。悠然として寛ろき物果に類はされぬを云ふ。
- 囉。音「シャ」、我なる程と云ふ意の時發する聲。
- 查渡。渡し場なり。
- 飯袋子。穀潰しと云ふか如し。

一莖菜を種ゑす、十方往來を攝待して盡く。伊が與に釘を抜き椀を抜いて炙脂帽子を拈卻し、鶻臭布衫を脱卻して、伊をして洒々地に箇の無事の稍僧と作さしめん、豈に快ならざらんや。門曰く、備身は椰子の如くにして、如許の大口を開き得たり。師便ち禮拜す。

嚴陽尊者初め趙州に參す。問ふ、「一物 不將來の時如何。」州曰く、「放下著。」師曰く、「既に是れ一物不將來、個の甚麼をか放下せん。」州曰く、「放不下ならば擔取し去れ。」師、言下に於て大悟す。

歸宗拭眼禪師曾て僧あり、問ふ、「如何なるか是れ佛。」宗云く、「我れ汝に向つて道はん、汝還つて信せんや否や。」僧云く、「和尚の誠言、焉んぞ信せざらん。」宗云く、「只汝便ち是。僧、宗の語を聞いて、諦審思惟、良久して曰く、「某便ち是れ佛ならば、卻つて如何が保任せん。」宗曰く、「一瞋目に在りて空花亂墜す。」其の僧言下に於て、忽然として契悟す。(會元少しく異なり、今大惠法語に依りて之を記す、僧は芙蓉道訓なり)

- ① 伊。彼れと云ふに同じ。
- ② 鶻臭。乳臭なり。
- ③ 不將來。持ち來らざるなり。
- ④ 諦審。あきらか、つまびらかなり。

法眼嘗て地藏に參す。日に見解を呈して道理を説く。藏之に語りて曰く、「佛法恁麼にあらず。」師曰く、「某甲、詞究り理絶す。」藏曰く、「若し佛法を論せば、一切見成。」師、言下に於て大悟す。

香嚴閑禪師遂に澗山に參す。山問ふ、「我れ聞く汝百丈先師の處に在りて、一を問へば十を答へ、十を問へば百を答ふと、此は是れ汝が聰明靈利、意解識想は生死の根本なり。父母未生の時、試に一句を道へ看ん。」師一問せられて直に得たり、茫然たることを。寮に歸りて平日看過する底の文字を將

て、① 頭のめより一句を尋ねて ② 醇對せんと要するに、竟に得ること能はず。乃ち自ら嘆じて曰く、「晝餅、饑に充つ可らず云云。」と。一日草木を爰除す、偶々瓦礫を抛ち竹を撃ちて聲を作す、忽然として省悟す。

十八 學道は須らく見地の淺深を委悉することを要すべし

雲門大師衆に示して曰く、「直に乾坤大地、纖毫の過患なきことを得るも、轉句一色を見ざるも、始めて是れ半提、更に全提の時節あることを知る可し。」

- ① 頭のめは、初めなり。
- ② 醇對、應對と云ふが如し。
- ③ 法執は、法は物の意なり、即ち一切の事物に對する執着を云ふ。
- ④ 冷機自知、自ら水の冷き、火の熨き事を實感するの意にて、體得する事を云ふ。
- ⑤ 過事は、誤りと云ふ程の意なり。

雲門曰く、「法身に亦兩般の病あり、法身に到ることを得るも、① 法執忘れ己見猶ほ存するが爲に、法身邊に坐在する、是れ一。直饒ひ法身を透得し去るも、放過すれば即ち不可なり。子細に檢點し來るに甚麼の氣息か有らんと云ふ、亦是れ病なり。」大惠曰く、「而今、實法を學する者の法身を透過するを以て極致と爲す、而も雲門返つて以て病と爲す。知らず法身を透過し了りて、作廢生かすべき。這裏に到りて人の水を飲んで、② 冷煙自知するが如し。別人に問ふことを著けず。別人に問はゞ禍事なり。」

洞山价禪師曰く、「末法の時代、人乾惠多し。若し眞偽を辨せんと要せば、三種の滲漏あり。一には

見滲漏、謂ゆる機、位を離れざれば、毒海に墮在す。明安云く、「見、所知に滞在するが爲なり、若し位を轉せざれば一色に坐在す。」言ふ所の滲漏と云ふは只是れ可の中、未だ善を盡さずんば、須らく來蹤を辨じて始めて玄機妙用を相續することを得べし。二には情滲漏、謂ゆる智常に ①向背して見處偏枯なり。明安云く、「情境、圓かならざるが爲に取捨に滞在して、前後偏枯にして鑑覺全からず。」是れ識浪流轉、途中邊岸の事なり。直に須らく句々二邊を離れて、情境に ②滯らざるべし。三には語滲漏、謂ゆる體、妙宗を失して機終始に味し。學者濁智流轉して此の三種を出でず。明安曰く、「體妙、宗を失すとは語路に ③滯在して、句宗旨を失す。機終始に味しとは、謂ゆる機に當りて暗昧にして、只語中に在りて宗旨圓かならず。」句々須らく是れ有語中の無語、無語中の有語にして始めて妙旨密圓なることを得るなり。」

無業國師曰く、「設ひ理を悟るの旨あつて、一知一解あるも是れ悟中の則、入理の門なることを知らず。 ④便ち永く世利を出すと云つて、山を巡り洞に傍ふて上流を輕忽し、心漏をして盡さず、理智をして明ならざらしむることを致す。空しく老死して成することなく、虚しく歲月を延ぶるに到る。且つ聰明、業に敵すること能はず、乾惠未だ苦輪を免れず、假使ひ才、馬

①向背は、背くの意にて、眞處を見る能はざるを云ふ。
 ②偏枯は、偏狭の意なり。
 ③滯在は、行きつまるの意なり。
 ④便は、即ちなり。
 ⑤馬鳴は梵語にては、阿濕縛羅沙 (Asvaghosa) といひ四印度の人、釋尊の滅後七百年代に出生し、始め外道に歸して佛教に抗せしも、龍尊者に論破せられて佛教に歸し、卻つて外道及び小乘教を摧破して、大乘佛教を興起す、起信論は實に其の作なりと傳ふ、知辨、世に絶したる人なり。

鳴に並び、解、龍樹に齊しきも、只是れ一生兩生、人身を失せず、根思、宿に淨きものは聞知して即解す。」(傳燈錄)

圓悟禪師曰く、「大死底の人、都て佛法の道理、玄妙、得失、是非、長短なし。這裏に到りて只恁麼に休し去る。古人之を平地上の死人無數、 ①荆林を過得する是れ好手と謂ふ。須らく是れ那邊に透過して始めて得べし。然も是くの如くなりとも雖も、如今の人、這般の田地に到ること、早く是れ得難し。或は若し依倚ありて解會あらば、則ち沒交涉。 ②詰和尚、之を見、不淨潔と謂ふ。五祖先師、之を命根不斷と謂ふ。須らく是れ大死一番して、卻つて活して始めて得べし。浙中の永光和尚道く、「言鋒若し ③差へば郷關萬里、直に須らく懸崖に手を撒して、自ら肯て承當すべし。絶後に再び ④甦らば君を欺くことを得ず。」非常の旨、人焉んぞ度さんや。」(碧巖)

古人曰く、「言を承りて須らく宗を會すべし、自ら規矩を立つること勿れし」と。如今の人只管に撞將し去りて便ち了す。得ることは則ち得たり、爭奈せん願預備なることを。若し作家面前に到りて三要の語を將て、空に印し泥に印し水に印して他を驗すれば、便ち見ん、方木圓孔に逗して

①龍樹は梵名那伽闍利樹那 (Nāgārjuna) にして、亦龍猛、龍勝等と譯す、佛滅七百年の頃(即ち支那後漢の末葉)、南天竺、婆羅門種、富豪の家に生る、天資聰明、弱冠の頃、天文、地理等、當時世に行はれたる學藝を修め通ぜざるなし、後佛法に志し大乘經典を究め之を弘通せしかば、之より大乘佛教大に興る、故に龍樹菩薩と尊稱せられ、大乘諸宗の祖師と敬せらる、多くの著述あり。
 ②荆棘林は「イバラ林」の事にて、難關或は難所の意なり。
 ③差へばは違へばの如し。
 ④甦は「よみがへる」、再生なり。
 ⑤爭奈は如何の如し。

下落の處なきことを。(碧巖)

圓悟禪師曰く、學道の士、初より信向あり、世の煩悩を厭ふ。長に恐る個の入路を得ること能はざることを。既に師の指に逢ふ、或は自己に因つて、直下に從本以來元自ら具足せる妙圓の眞心を發明して、境に觸れ縁に遇ふて、自ら落著を知りて、便乃ち守住す。患ふらくは出得すること能はざること。遂に窠臼を作す、機境の上に向つて照を立て用を立て、咄を下し拍を下し眼を努り眉を揚ぐ、一場の特地なり。更に本色の宗匠の盡く與に如許の知解を拈却するに遇ふて、直下に本來無爲無事無心の境界を契證す。然して後羞慚を識り休歇を知りて一向に冥然たり。諸聖すら尙ほ他の起處に覺むるに得ず、況んや其の餘をや。所以に巖頭道く、「他の得底の人は只々閑地を守る、二六時中無欲無依なり。」是れ安樂の法門ならざる可けんや。(圓悟心要)

洛浦和尚上堂末後の一句、始めて牢關に到る、要津を鎖斷して凡聖を通せず。尋常諸人に向つて道ふ、任從ひ天下樂み欣々たるも、我れ獨り肯せず、上流の士を知らんと欲す。佛祖の言教を將て、額頭上に貼在せされ、龜の圖を負ふが如く、自ら喪身の兆を取れ。鳳、金網に縈はる、霄漢に趨ること何を以てか期せん。直に須らく旨外に宗を

- ①煩悩の淵は穢る、或は濁るの意なり、故に煩はしき濁世と云ふ事なり。
- ②便乃は即ちなり。
- ③窠臼は穴の事なり、同一窠臼に落つゝ等の語あり。
- ④宗匠は師家、或は知識に同じ。
- ⑤契證は悟了なり。
- ⑥覺むるは求むの意なり。
- ⑦二六時中は十二時中の事に、終日と云ふの意なり。
- ⑧凡聖は凡夫と佛との意なり。
- ⑨任從ひはたとひなり。

明むべし、言中に向つて則を取ることを勿れ。是を以て石人の機、汝に似らば也た巴歌を唱ふることを解せん。汝若し石人に似たらば雪曲も也た和すべし。(會元)

白雲端和尚曰く、直に須らく悟りて始めて得べし。悟後更に須らく人に遇ふて始めて得べし。備道ふ、既に悟り了りて便ち休せん、又何んぞ更に人に遇ふことを須ひんと。若し悟り了りて人に遇ふ底は、垂手方便の時に當つて、着々自ら出身の路あつて、學者の眼を瞎却せず。若し祇だ乾蘿蔔頭を悟得する底は、唯だ學者の眼を瞎却するのみにあらず、自己を兼ねて動もすれば、便ち先づ自ら録を犯し手を傷る。(會元)

- ①乾蘿蔔頭。趙州大羅蔔頭は巖巖第三十則にあり。
- ②糞餅は、餅或は團子の事なり。
- ③執すればは、物に執著するの意なり。

五祖演和尚道く、一般の人あつて參禪す、琉璃瓶裏に糞糞を搗くが如くに相似たり。更に動轉することを得ず、抖擻し出さず、觸著すれば便ち破る。若し活潑潑地ならんことを要せば、但々皮殻漏子の禪に參せよ。直に高山上に向つて撲將下來するに、亦不破亦不壞。(碧巖)

晦堂和尚、衆に示して云く、若し也た單に自己を明めて、目前を悟らざれば、此の人眼あつて足なし。若し目前を悟りて自己を明めざれば、此の人足あつて眼なし。此の二人に據るに十二時中常に一物あつて胸中に蘊在す、物既に胸に在らば不安の相、常に目前に在らん。既に目前に在りて途に觸れて滯を成さば、作麼生か平穩なることを得去らん。祖も言はずや、之を執すれば度を失す、必ず邪

路に入る。之を放てば自然に體に去住なし。」(正法眼藏)

葉縣省和尚云く、「參學は須らく參學の眼を具すべし。見地は須らく見地の句を得べし。有る時は句到りて意到らず、妄に前塵を緣し影事を分別す。有る時は意到りて句到らず、盲の象を摸し各々異端を説くが如し。有る時は意句俱に到る、虚空界を打破し光明十方を照す。有る時は意句俱に到らず、無目の人縦横に走りて、忽然として覺えず深坑に落つ。」(會元)

玄沙備禪師、大法擧し難く上根に遇ふこと罕にして、學者語に依りて解を生じ、照に隨つて宗を失することを疾んで、迺ち綱宗三句を示す。曰く、「第一句。且く自ら承當して現成具足せり、盡十方世界更に他なきが故に、祇だ是れ仁者なり。更に誰をして見、誰をして聞かしめん。都來是れ汝が心王の所爲、全く不動智と成る、只自ら承當することを闕く。喚んで開方便門と作す。汝をして一分の眞常流注有ることを信せしむ。古に亘り今に亘りて、未だ不是ならず、未だ非ならざる者あらず。然も此の句只々平等の法を成す。何を以ての故に、但是れ言を以て言を遣り、理を以て理を逐ふ、平常の性相、攝物利生のみ。且つ宗旨に於て猶ほ是れ前を明めて後を明めず、號して一味平實分證法身の量と爲る、未だ出格の句あらず、句下に死在して未だ自由の分あらず。若し出格の量を知らば、心魔に使はるゝことを被らず。手中に入到して

●異端を説くが如しは、盲人が二人、象を撫でて各々自己の撫でて知つた一端を以て争つたと云ふ事なり、即ち徹底せざるものは、只己の知る一面を見て、全體なりと執するに譬ふ。

便ち轉換落落々地なり。言、大道に通じ平懐の見到墮せず、是を第一句綱宗と謂ふなり。第二句。因を廻し果に就いて、平常一如の理に著せず、方便喚んで轉位投機と作す。生殺自在、縱奪隨宜、出生入死廣く一切を利す、廻かに色欲愛見の境を脱す、方便喚んで頓超三界の佛性と作す、此を二理雙明に二義齋照と名づく、二邊に動さるゝことを被らず。妙用現前是を第二句綱宗と謂ふなり。第三句。大智性相の本あることを知る、其の過量の見に通ず。明陰洞陽、廓周法界、一眞體性、大用現前、應化無方、全用全不用、全生全不生、方便喚んで慈定の門と作す。是を第三句綱宗と謂ふなり。」

十九 學道は須らく得底の人に在りて必ずしも知解を嫌はざる

ことを識るを要すべし

●縱奪隨宜は、與ふも奪ふも時宜の宜しきに隨ふを云ふ。
●應化無方は、如何なるものにも接化の及ぶ事を云ふ、無方は限りなきの意なり。
●從容は「落ち付く」の貌なり。

遠錄公云く、「未透底の人は句に參するより、如かず意に參せんには。透得底の人は意に參せんよりは、如かず句に參せんには。」(碧巖)
黃龍心禪師大悟の後、從容游泳して衆中に陸沈す。時々往いて雲門の語句を決す。南公曰く、「是れ般の事を知らば便ち休せよ。汝許多の工夫を用ひて作麼。」公曰く、「然らず、但々纖疑の在るあれば無學に到らず、安んぞ能く七縱八橫、天廻り地轉せんや。」南公、之を肯ふ。(僧寶傳)
圓悟禪師曰く、「久參の先德、見て未だ透らず、透りて未だ明めざるあり、之を請益と謂ふ。若し是

れ見得透する請益は、卻つて語句上に周旋して、凝滯あること無きことを要す。久參の請益は賊の奥めに梯を過す。」(碧巖)

歸宗和尚曰く、「從上の古徳、是れ知解なきにあらず。他の高尚の士は常流に同じからず、今時自ら成し自ら立すること能はず、虚しく時光を度る。湧泉云く、「見解言語總に知通せんことを要す。若し識不盡ならば敢て輪廻し去ること存りと道はん。」何と爲して此くの如くなる。蓋し識漏未だ盡きざるが爲なり。汝盡却して今時始めて成立することを得ん。」(會元)

大惠禪師曰く、「從上の大智惠の士、皆知解を以て 儔侶と爲し、知解を以て方便と爲し、知解の上に於て平等の慈を行じ、知解の上に於て諸の佛事を作さすと云ふこと莫し。龍の水を得るが如く、虎の山に 靠るに似たり。終に此を以て惱と爲さず、只他知解の起處を識得するが爲なり。」

宗鏡錄に云く、「若し智惠を以て非と爲さば、大智の文殊、應に法王の子と稱す可らず。若し多聞を以て是れ過とせば、無聞の比丘、地獄の人と作るべからず、應に須らく智惠を以て其の多聞に合すべし。終に詮を執して指を認めず、多聞を以て其の智惠を廣うせば、孤陋と成りて面墻することを免れん。所以に云ふ、「智あつて行なきは國の師なり、行あつて智なきは國の用なり。智あり行あるは國の寶なり。智なく行なきは國の賊なり。」是を以て智は須らく學すべし、行

① 儔侶は伴侶、或は同輩と云ふに同じ。
② 靠るは依るの意なり。
③ 智あつて云々の國の師、國の用、國の寶等は傳教大師の言なり。

は須らく修すべし。智を闕けば道の譬なり。行なきは乃ち國の賊なり、當に知るべし、^①名相の關鎖は智鑰に非ざれば開悟し難く、^②情想の勾牽は惠刀に非ざれば斷なきことを。」

二十 學道は須らく賓主の句を辨することを要すべし

臨濟和尚曰く、「參學の人、大いに須らく子細にすべし。主客相見するが如くんば、便ち言論往來あり。或は物に應じて形を現じ、或は全體作用し、或は機權を把りて喜怒し、或は半身を現じ、或は獅子に乗り、或は象王に乘る。眞正の學人あるが如くんば、便ち喝して先づ一箇の膠盆子を拈出す。善知識是れ境なることを辨せず、便ち他の境上に上りて、模を作し様を作す、學人便ち喝す。前人肯へて放たす。此は是れ膏肓の病醫するに堪へず、喚んで客主を看ると作す。

① 名相の關鎖は、名や形相に因はれて居る事を云ふ。
② 情想の勾牽は、凡情や妄想に縛られて居る事を云ふ。

或は善知識、物を拈出せず。學人の門處に隨つて即ち奪ふ、學人奪はれて死に抵るまで放たす。此は是主客を看る。或は學人あつて一個清淨の境に應じて、善知識の前に出す。善知識是れ境なることを辨じて、把得して坑裏に抛向す。學人言く、「大好善知識」と。即ち云く、「咄哉、好惡を知らず」と。學人便ち禮拜す。此は喚んで主を主と看ると作す。或は學人あつて枷を被り鎖を帶し、善知識更に與に一重の枷鎖を安す。學人歡喜して彼此辨せず、客、客を看ると爲す。」

首山念和尚、衆に示して曰く、「諸上座盲喝亂喝することを得ざれ。尋常汝に向つて道ふ、寶は始終

賓、主は始終主、賓に二賓なく、主に二主なし。若し二賓二主あらば、兩箇 瞎漢と成る。所以に我れ若し立せば、爾須らく坐すべし。我れ若し坐せば、爾須らく立つべし。坐は爾と共に坐、立は爾と共に立、然も是くの如くなりとも雖も、急に眼を著けて始めて得べし。」

二十一 學道は須らく 履踐の工夫を辨することを要すべし

唐の宣宗皇帝、弘辨禪師に問うて曰く、「何をか頓見と爲し、何をか漸修と爲す。」對へて曰く、「頓に自性を明むれば佛と 同儔なり、然も無始の染習あるが故に、漸修を假りて對治し、性に順して用を起さしむ。人の飯を喫して一口に即ち飽くが如し。」

馮山和尚上堂、夫れ道人の心は質直無偽、背なく面なく、詐妄の心なく、一切時中視聽尋常なり。更に委曲なし、亦眼を閉ち耳を塞がす。但情物に附かざれば即ち得。從上の諸聖祇た濁邊の過患を説く。若し如許

多の惡覺情見想習の事なくば、譬へば秋水の澄淨清淨、無爲澹泞無礙なるが如し。他を喚んで道はんと作す、亦無事の人に名づく。時に僧あり、問ふ、「頓悟の人更に修ありや否や。」師曰く、「若し眞悟して本を得ば、他自ら時を知る、修と不修と是れ兩頭の語、如今初心、縁より一念頓に自理を悟ることを得ると雖も、猶ほ無始曠劫の 習氣あり、未だ頓に淨きこと能はず、須らく渠をして現業の流識を

① 瞎漢は、「ドメクラ」の程の意なり。

② 履踐は、實踐躬行なり。

③ 同儔は、同輩なり。

④ 背なく云々は、裏面なくの意なり。

⑤ 從上は、從來の如し。

⑥ 習氣とは、例へば香料の香氣の如し、目に見る能はざれども、香りの残るが如し、煩惱も亦此の如し、煩惱の垢は除去すとも香氣の如き習氣の染み付きて残るを云ふ。

淨除せしむべし、即ち是れ修なり。別に法あつて渠をして修行趣向せしむ可らず。聞より理に入り、聞理深妙にして、心自ら圓明なれば惑地に居らず。縦ひ百千の妙義あつて、抑揚、時に當るも、此れ乃ち得坐被衣自ら活計を作すことを解して始めて得。要を以て之を言へば、實際理地一塵を受けず、萬行門 中一法を捨てず。若し也た單刀直入せば、凡聖情盡き、體露眞常、 理事不二即ち如々の佛。」(會元)

達磨大師、二祖に告げて曰く、「正法眼藏我れ今汝に付す、吾が滅後二百年、衣は止つて傳はらず、法は沙界に周し。道を明むる者多く、道を行する者は少し。理を説く者は多く、理に通ずる者は少し。 潛符密證千萬有餘、汝當に闡揚すべし。未悟を輕んずる勿れ、一念機を廻せば便ち本得に同じ。」

大珠和尚、僧問ふ、「如何なるか是れ修行。」師曰く、「但自性を汚染すること莫れ、即ち是れ修行。自ら欺誑すること莫れ、即ち是れ修行。大用現前即ち是れ 無等等の法身なり。」(傳燈錄)

湧泉欣禪師上堂、我れ四十九年、這裏に在るすら尙ほ自ら時あつて走作す。汝等諸人大口を開くと莫れ。見解の人は多く、行解の人は萬中に一箇もなし。見解言語總に知通せんことを要す。若し識

① 理事不二。理は本源の眞理即ち平等絶對の本體なり、事は現象差別の森羅萬象を云ふ。此二、本と別ならず、本體と萬象と融即して不二なるを云ふ。

② 潛符密證は、以心傳心と云ふが如し。

③ 無等々、等比するものなき、絶對の意なり。

不盡ならば、敢へて輪廻し去ることありと道はん。何としてか此くの如くなる、蓋し識漏未だ盡きざるが爲なり。汝但々盡御して今時始めて成立つことを得。(會元)

大惠禪師曰く、「此の事は極めて容易ならず、須らく慚愧を生じて始めて得べし。往々に利根上智の者は之を得るに力を費さず、遂に容易の心を生じて便ち修行せず。多くは目前の境界に奪ひ將ち去られて、主宰と作ることを得ず。日久しく月深うして、迷ふて返らず、道力、業力に勝つこと能はず。魔其の便を得て、定んで魔の爲に攝持せられて、臨命終の時亦力を得ず。」

圓悟禪師曰く、「人の射を學ぶが如く、久々にして方に中る。悟は則ち利那なり、履踐の工夫は須らく長遠に資るべし。鶉鳩兒の出生下し來りて、赤骨體地、養ひ來り饑ひ去りて、日久しく時深うして羽毛既に就りて、便ち高く飛び遠く擧ることを解するが如し。所以に悟明かに透徹して、政に調伏することを要す。」(心要)

圓悟曰く、「理は須らく頓悟すべし、事は漸修を要す。」(心要)
南泉云く、「我れ十八上にして、作活計を解す。」趙州道く、「我れ十八上にして、破家散宅を解す。」又道く、「我れ南方に在る二十年、粥飯の二時は是れ雜用心の處を除く。」

①利根上智は、利發有識の意なり。
②方は、的の意なり。
③調伏、梵語毘奈耶(Vinaya)の意なり、譯して離行と云ふ、舊譯には律と云ふ、能く衆生の身、口、意の三業を調和し、諸の惡業を伏滅して、諸の善業を作さしむるが故に此名あり。

洞山价禪師曰く、「直に須らく信心、物に觸れず、歩々、處所なくして、常に間斷せずんば相應することを得べし。」(傳燈錄)

大慈寰中禪師曰く、「一丈を説得せんより、如かす一尺を行取せんには、一尺を説得せんより、如かす一寸を行取せんには。」洞山又云く、「行不得底を説取せんより、如かす説不得底を行取せんには。」晦堂心和尚曰く、「予初め道に入る、自ら甚だ易きことを恃む。黃龍先師に見えて後に遠んで、退いて日用を思ふに、理と矛盾する者極めて多し。遂に力めて之を行ふこと三年、^①祁寒溽暑なりと雖も、志を確にして移らず、然して後に、方に事々、理の如きことを得たり。

①黃龍先師、黃龍惠南禪師なり。
②祁寒溽暑は、大寒酷暑の意なり。
③孩子是赤子なり。

而今、咳唾掉臂も也た是れ祖師西來意。(禪門實訓)

香林遠禪師嘗て云く、「老僧四十年、方に打成一片。」

圓悟、此の語を擧して得底の人をして、勤めて履踐工夫せしむ。真に旨ある哉。

圭峯禪師曰く、「眞理は即ち悟りて頓に圓かなるとも、妄情は之を息めて漸に盡く。頓圓は初生の孩子の如く、一日にして肢體全し、漸修は長養して人と成るが如し。多年にして志氣方に立す。」(會元)
圭峯、又山南の溫造尙書問ふ、「理を悟り妄を息むるの人、結業せず。一期の壽終るの後、靈性何にか依る。」師曰く、「一切衆生、覺性を具有せずと云ふことなし。靈明空寂、佛と殊なることなし。但々

無始劫來未だ曾て了悟せざるを以て、妄に身を執して我相と爲す、故に愛惡等の情を生ず。情に隨ふて業を造る、業に隨ふて報を受く。生老病死、長劫輪廻す。然も身中の覺性未だ曾て生死せず。夢に驅役を被むるとも、身本安閑なるが如し。水の氷と作るるとも、濕性不易なるが如し。若し能く此の性を悟れば、即ち是れ法身、本自ら無生、何んぞ依託あらん。靈々と味まず、了々として常に知る、從來する所なく、亦所去なし。然も多生の妄執習ふて性を以て成る。喜怒哀樂微細に流注す。眞理然も頓に達すと雖も、此の情以て卒に除き難し。須らく長へに覺察して之を損して又損すべし。風の頓に止んで波浪漸々停まるが如く、豈に一生に修する所、諸佛の力用に同じかる可けんや。但々空寂を以て自體と爲すべし、色身を認むる勿れ。靈知を以て自心と爲して、妄念若し起らば、都べて之に隨はず、即ち臨命終の時、自然に業繫ぐこと能はず、中陰ありと雖も向ふ所自由、天上人間意に隨つて寄託す。若し愛惡の念已に泯すれば、即ち分段の身を受けず。自ら能く短を易へて長と爲し、麤を易へて妙と爲す。若し微細の流注、一切寂滅すれば、唯々圓覺の大智、朗然として獨り存す。即ち機に隨つて千百億の化身を應現して、有縁の衆生を度す。之を名づけて佛と爲す。謹對。」

①業とは、梵語の Karma なり、業は造作を義とす、精神中心をして或る事を造作せしむる一つの力ありと云ふ、業に就いては部執に依りて其説一ならず。

②泯は、亡なり。

圓悟和尚曰く、「古の有道宿徳、人をして既に根塵を脱し、密印を弘むるに當りて、三十二年冷寂々

地の工夫を做さしむ。纔かに纖毫の知見解路あれば、隨つて即ち掃攝す。亦掃攝の迹を留めず、手を那邊に撒して、全身放下す。硬糾々地に大快活を得。唯恐る、是くの如きの作略あるを知ることを。禍事なり。」(圓悟心要)

嫩安和尚云く、「安んぞ瀉山に在ること三十年來、瀉山の飯を喫し、瀉山の屎を屙し、瀉山の禪を學ばず、只一頭の水牯牛を見る。若し路に落ちて草に入れば、便ち牽き出す。若し人の苗稼を犯さば即ち鞭撻す、調伏すること既に久し、可憐生、人の言語を受く。如今變じて箇の露地の白牛と作る、常に面前に終日露廻々地、遊くとも亦去らざるなり。」(正法眼藏)

圓悟和尚曰く、「既に旨を得るの後、綿々として相續し管帶して、間斷なからしめよ。聖胎を長養し、縦ひ境界惡縁に逢ふとも、能く正知見定力を以て、融攝して一片と成さしめば、生死の大變も自己の胸次を動するに足らず。養ひ得ること歳深くして、個の無爲無事大解脱の人と成る。豈に是れ能事已に辨じ、行脚事畢るにあらすや。」(圓悟心要)

興善惟寬禪師、憲宗 詔して闕下に至る、侍郎白居易嘗て問うて曰く、「既に禪師と曰ふ、何を以てか説法する。師曰く、「無上菩提と云ふは、身に被むるを律と爲す、口に説くを法と爲す、心に行するを禪と爲す。應用のものは三。其の致は一なり、譬へば江湖淮漢の處に在りて名を立つるが如く、名、一ならずと雖も、水性は無二なり。律は即ち是れ法、法は禪と離れず、云何んぞ中に於て妄に分別を起

さん。曰く、「既に分別なくんば何を以てか心を修せん。」師曰く、「心本損傷なし、云何んぞ修理を要す、垢と淨とを論ずることなく、一切念を起すこと勿れ。」曰く、「垢は即ち念す可らず、淨は念することなくんば可ならんや。」師曰く、「人の眼睛の上に一物を住す可らざるが如く、金屑、珍寶なりと雖も、眼に在りて亦病と爲る。」曰く、「修なく念なくば又何んぞ凡夫に異ならんや。」師曰く、「凡夫は無明、二乗は執著、此の二病を離る、是れ眞修と曰ふ、眞修は勤むることを得ず、忘るゝことを得ず。勤むれば即ち執著に近し、忘るれば即ち無明に落つ、此れを必要と爲すと云爾。」(會元)

鴻山和尚、仰山に問うて曰く、「寂子彌が心識微細の流注、無にし來ること幾年ぞや。」仰山未だ即答せず、卻つて問ふ、「和尚無にし來ること幾年ぞ。」其の時、鴻山自ら是れ七十餘歳。仰山に謂つて曰く、「老僧無にし來ること已に七年、寂子何如ん。」

仰山云く、「惠寂正に關すること有り。此を以て之を觀れば、這裏麤心をして脱空を説いて相瞞せしむること得てんや。眞に大力量あつて始めて得ん。」(大惠普說)

二十二 學道は須らく大休歇の田地に到り得ることを要すべし

斯の集成りぬ。大休歇の田地に至りて編類を著げざるもの久し。一日僧あり、問うて曰く、「庵主斯の集を作る、謂つ可し、初學の觀覽に便ありと。然も大休歇の一門に至りて、編排を著げざることは何んぞや。」予曰く、「我れ知らず、我れ會せず。」僧曰く、「庵主什麼と爲す。」語未だ終らざるに、

① 眼睛は、瞳(ひとみ)なり。
② 大休歇は、大安樂と云ふが如し。

予、手を拍つて呵々として笑ふ。其の僧茫然たり、仍つて山中四威儀の偈を作る。聊陳志に云く、「山中の行赤脚、尖頭烏道平かなり、大蟲に逢著して牙爪に觸れ、歸來杖子暗に相驚く。山中の住、只識る、朝より又暮に到ることを。客來りて若し什麼に因ると問はゞ、萬岳千峯努力して怒る。山中の坐靠取す、須彌那一座、是れ禪に倦んで駱駝を學ぶ、時に衲衣を把りて破を補はんと欲す。山中の臥、飽餉々地、一箇を消す、默耀韜輝枕兒に付す、幸然として人の滯貨を求むること無し。」

③ 大蟲、蛇を大虫といふ。
④ 須彌、梵語「スメール」の譯語にして、宇宙最高の山なり、故に最上の意にこの文字を用ゆ。

國譯緇門寶藏集卷之下 終

古徳曰く、「多く前言往行を識りて、遂に其の志を成す」と。一絲先師曾て丹山に隠れ、宴寂の餘、華竺の墳典を閲し、言行に便ある者を拾ふて、輯録して編を爲す、之を目づけて緇門寶藏と曰ふ。總て三卷二十二章を得、始め信心を決し、生死を怖るるを以て本と爲す。終り履踐を勤め休歇に到るを以て極と爲す。其の中間に在る者師を擇び友を簡ぶの要、性を見、心を明むるの理以て向上末後、邪正寶主の句に至るまで、部類を剖列して該載せざるなし。間々評論を加へて之を折衷す。學者往々に襲藏して、夜光を獲るが如くす。余竊かに之を觀るに、魯魚豕亥相誤ること甚だ夥し。客歲の冬、本書を參考して、大概訂正し傍ら倭點を加へて、以て初學の觀覽に便とす。尙ほ恐らくは訛舛鮮からざらんことを。今將に梓に鑿し諸れを不朽に傳へて、以て後進の鑑と爲さんとす。讀者儼し能く言に順ひ行に遵へば、遂に其の大志を成する者必せり矣、決せり矣。若し夫れ宿に靈骨あり、超宗の異同を具す、亦刺語を成さず。

寛文龍集癸丑正月穀旦

永源小比丘惠詢謹跋

①梓に鑿し、は版に上するを云ふ。
②驚しは、若しなり。

重刊緇門寶藏集叙

道本無言、由言顯道、是故有漫錄、有寶訓、有筆語、有武庫、伏惟一絲守和尙、初隱洛之西岡、後入丹山、杳絕蹤跡、然湖海緇徒、藹足走風、就樹縛茅者、不知其幾也。終名達九重、開榛法常、靈源二刹、特賜徽號、曰定慧、明光佛頂國師、示住庵古標之暇、拈撫佛祖遺言、往行間加品藻、名曰緇門寶藏集、軒知昏衢、慧炬病家良藥也。不翅利今時、抑亦垂化於後昆者歟。善茂因加焉、嗚呼寶永之頃、羅池魚之患、板成鳥有、欲行于世、未由也已矣。邇日有一僧、重鑿于梓、圖之弘通、臨僞其功、謁叙於予、確辭不可、言忘譚劣、秀語以題卷首、參玄之徒行有餘力、則且緇且閱、拳拳服膺、一字一字一言一言、果知國師之骨髓也。此又由言顯道者不耶、然則豁開寶藏、運出家珍、一在於斯矣。雖然玉匙金鑰、今歸何人手裡、勿道新羅在海東。

安永第八星躔己亥孟冬日
前華嶽良哉元明謹撰

緇門寶藏集卷之上

桐江庵主 文守編輯

一 學道須要生決定信

佛曰、信爲道元功德母、長養一切諸善法、斷除疑網、出愛流、開示涅槃無上道、又云、信能增長智功德、信能必到如來地。

經曰、信能永斷煩惱本、又云、信能速證解脫門。

高峯妙和尚曰、從上若佛若祖、超登彼岸、轉大法輪、攝物利生、莫不由此一個信字中流出、昔有善星比丘侍佛二十年、不離左右、蓋謂無此一箇信字、不成聖道、生陷泥墮。

華嚴觀云、有信無解、增長無明、有解無信、增長邪見、信解圓通、方爲行本、云云、又云、有信不信、法界、信是邪。

大惠禪師曰、具正信、立正志、此乃成佛作祖基本也、舍利弗曰、以信得入、非己智分。

智度論云、佛言、若人有信、能入我大法海中、能得沙門果、不空剃頭染衣、若無信、是人不能入我大法海、如枯樹不生華實、不得沙門果、雖剃頭染衣、讀種種經、能難能答、於佛法中空無所得、以是義故、在佛法初善、以信根故。經云、佛法大海、信爲能入。

二 學道須要信得生死大事

無業國師曰：只這口食身衣，盡是欺賢罔聖，求得將來，他心惠眼觀之，如喫膿血一般，總須償他始得云云。又曰：臨終之時，一毫凡聖情量不盡，纖塵思念未忘，隨念受生，輕重五陰，向驢胎馬腹裏，託質泥犁，鑊湯裏煮，爍一徧了，從前記持憶想，見解智惠，都盧一時失却，依前再爲蟻蚊虻。

如今學佛之徒，日學月積，爲功者，不出記持憶想，見解智惠八字，這個已如一時失却，畢竟何以敵佗生死，真正學人，豈得不著忙耶？

大惠禪師曰：如某未睡著時，佛所讚者，依而行之，佛所訶者，不敢違犯，從前依師，及自做工夫，零碎所得者，惺惺時，都得受用，及乎上牀半醒半覺時，已作主宰，不得夢見得金寶，則夢中歡喜無限，夢見被人以刀杖相逼，及諸惡境界，則夢中怕怖惶恐，自念此身尙存，只是睡著，已作主宰，不得，況地水火風分散，衆苦熾然，如何得不被回換，到這裏，方始著忙。

妙喜翁自二十餘歲，甫三十六，懷此大疑，一日忽在園悟，一言之下，始得平穩，蓋他上梢，只爲怕生死之心切，又不明實敵生死之法，則不能自休而已，今之學者，初無深怕生死之正念，只將麤心淺志，參禪學道，纔得小見小解，以爲萬足，嗚呼！古今之異，因是岐焉，宜矣哉。

人天寶鑑云：湖南雲蓋山智禪師，夜坐丈室，忽聞魚灼氣，枷鎖聲，卽而見之，迺有荷火枷者，火猶起滅不停，枷尾倚於門闥，智驚問曰：汝爲誰？苦至斯極耶？荷枷者對曰：前住當山守願也，不合互將檀越供僧物，造僧堂，故受此苦。智曰：作何方便可免？願曰：望爲估直僧堂，填設僧供，可

免爾智以己贊如其言爲償之，一夕夢，願謝曰：賴師力，獲免地獄苦，生人天中，三生後，復得爲僧，今門闥燒痕猶存。清規

王荆公之子芳，所爲不善，芳死後，荆公恍然，見芳荷鐵枷，立門側，因是捨宅爲寺，爲芳追薦冥福。名臣言行錄

山庵恕中禪師曰：杭州天目山義斷崖，見高峯得旨，歸向者甚衆，旣死，現夢託生於吳興細民家，後爲僧，名瑞應，字寶曇，自幼至壯，受人禮拜供養，無虛日，余寓居天界時，寶曇亦在焉，隣居頗久，察其所爲，碌碌與常人無異，間有以己躬事叩之者，但懍懍而已，前身實非常人，胡乃頓忘前世所習，如是古人謂：聲聞尙昧於出胎，菩薩猶迷於隔陰，然則修行人，可不慎歟。山庵雜錄

又曰：洪武庚戌冬，奉化田子中，訪余太白，同居者久，余偶言金剛般若經，閱羅王界，稱爲功德經，故世人薦亡者多讀之，子中誓終身受持，一日值其母諱日，發心誦此經百過，以薦晨起坐，松榻上，方誦至九遍，見鬼卒枷一老嫗，跪榻前，髮離披覆面，熟視之，乃亡母也，子中倉卒不知所爲，須臾引去，若將脫枷者，於是子中大泣，恨不卽時輟經，與母相勞問，余謂此經功德之大，不可云喻，若子中發心持誦，卽冥感陰界，使母子兩得相見，以釋其苦，嗚呼！偉哉。山庵雜錄

玄沙備禪師曰：如今若不了，明朝後日，入驢胎馬肚裏，牽犁拽把，銜鐵負鞍，確擗磨磨，水火裏燒煮去，大不容易受，大須恐懼。

鳩摩羅多尊者曰：善惡之報有三時焉，凡人但見仁天，暴壽逆吉，義凶便謂亡因果，虛罪福，殊

不知影響相隨毫釐塵忒縱經百千萬劫亦不磨滅。

經曰假使百千劫所作業不亡因緣會遇時果報還自受。

無業國師曰嗟乎得人身者如爪甲上土失人身者如大地土良可傷哉。

三 學道須要不毀犯佛祖規範

智論云學習外典如以刀割泥泥無所成而刀自損又如視日光令人眼暗。

今時僧侶未解半卷金文一冊語錄還習詩文讀外典尤可憐也雖然往古高僧或通異學或善篇章其意無他只要摧伏外道助通佛化而已因是驅得局見陋儒偏墮俗士以成內外護蓋由此也如夫大顛之於韓愈明教之於歐陽此其人也豈其同今時庸編街才飾能求名微利之類乎謹報道流器量有分世齡有數確守割泥之誠莫觸外典詩文等之書幸有佛祖文字工夫若有餘力則請染指矣。

智覺禪師曰若不去姪斷一切清淨種若不去酒斷一切智惠種若不去盜斷一切福德種若不去肉斷一切慈悲種。

而今門下禪侶於此姪盜酒肉確得一生不犯之力足以爲我家種草其餘微細過患自然脫去蓋使他常學無心道故。

楞嚴曰姪心不除塵不可出縱有多智禪定現前如不斷姪必落魔道若不斷姪修禪定者如蒸砂石欲其成飯經百千劫祇名熱砂汝以姪身求佛妙果縱得妙悟皆是姪根根本成姪輪轉三塗必不能出必使姪機身心俱斷斷性亦無於佛菩提斯可希冀。

功德圓滿經曰末世比丘姪欲熾盛日夜犯小童外相似僧內心如外道雖各別男女所念業因一。

近古以來禪門徒以犯男色爲常時俗循習爲弊更無知其非者至若領知識名字者亦至無忌憚何其狂妄如此甚乎竊觀他耽著男色者其愛纏嫉妬甚於塵俗之荒女色夫沙門以佛祖大事爲念又何暇耽著塵俗所嗜乎山僧會裏不許失口打這般俗話何況就他少年沙彌等做戲言戲動者乎。

四 學道須要生慚愧

希顏首座釋難文曰蓋出家爲僧豈細事乎非求安逸也非求溫飽也非求蝸角利名也爲生死也爲衆生也爲斷煩惱出三界海續佛惠命也去聖時遙佛法大壞汝敢妄爲爾寶梁經云比丘不修比丘法大千無唾處云云有六尺之身而無智惠佛謂之癡僧有三寸舌而不能說法佛謂之啞羊僧似僧非僧似俗非俗佛謂之烏鼠僧亦曰禿居士。

懶庵樞和尚曰楞嚴經云云何賊人假我衣服裨販如來造種種業若不戒攝心者縱饒解齋佛祖未免裨販如來造種種業況平平之人。

高庵住雲居每見衲子室中不契其機者卽把其袂正色責之曰父母養汝身師友成汝志無飢寒之迫無征役之勞於此不堅確精進成辨道業他日何面目見父母師友乎衲子聞其語有泣涕而不可已者其號令整嚴如此 禪門寶訓

古德法令感人如此古之衲子以至誠而求道也如此今雖垂五百歲若有真實辨道衲子

讀之豈得不寒心乎。

雲峯悅和尚小參略云：豈不見教中道：寧以熱鐵纏身，不受信心人衣；寧以洋銅灌口，不受信心人食；上座若也是去，直饒變大地作黃金，攪長河爲酥酪，供養上座，未爲分外；若也未是，至於滴水寸絲，便須被毛戴角，牽犁拽把，償他始得。

五 學道須要擇師擇友

先聖曰：寧可破戒，如須彌山，不可被邪師薰。一邪念，如芥子許，在情識中，如油入麪，永不可出。

大惠書

佛曰：若諸衆生，雖求善友，遇邪見者，未得正悟，是則名爲外道種性。邪師過謬，非衆生咎。

覺經

圓悟禪師曰：學道先於擇師，既得真正具頂門眼善知識，依其決擇，死生大事。

心要

傳心法要

尸迦越經云：弟子事師有五事：一當敬難之，二當知其恩，三所教隨之，四思念不厭，五當從後稱譽。

釋氏要覽

馮山祐禪師曰：生我者父母，成我者朋友，親附善者，如霧露中行，雖不濕衣，時時有潤；狎習惡者，長惡知見，曉夕造惡，即日交報，歿後沈淪。

湛堂和尚謂妙喜曰：像季比丘，外多徇物，內不明心，縱有弘爲，皆非究竟。蓋所附卑猥而使然，如搏牛之蝱，飛止數步，若附驥尾，便有追風逐日之能，乃依托之勝也。是故學者，居必擇處，遊

必就士，遂能絕邪僻，近中正，聞正言也。

禪門寶訓

因果經云：朋友有三要法：一者見有失，輒相曉諫；二見有好事，深生隨喜；三在苦厄，不相棄捨。四分律云：具七法，方成親友：一難作能作，二難與能與，三難忍能忍，四密事相告，五互相覆藏，六遭苦不捨，七貧窮不輕。

尸迦越經云：一見作惡，往屏處曉諫呵止；二所有急事，當奔赴救護；三所有私語，不得說向他；四常相敬難，五所有好事，當多少分與之。

釋氏要覽

善知識者難得，遭逢譬如梵天投一芥子，安下界針鋒之上，猶易。值明師道友，得聞正法，甚難，如西天九十六種外道，皆求出離，因遇邪師，反沈生死。

宗鏡錄

六 學道須要如實信受

六祖一日謂衆曰：汝等自心是佛，更莫狐疑。外無一物而能建立，皆是本心。生萬種法，故經曰：心生種種法生，心滅種種法滅。若欲成就種智，須達一相三昧，一行三昧。若於一切處而不住相，於彼相中，不生憎愛，亦無取捨，不念利益成壞等事，安閒恬靜，虛融澹泊，此名一相三昧。若於一切處，行住坐臥，純一直心，不動道場，直成淨土，此名一行三昧。

百丈懷海禪師僧問：如何是大乘頓悟法要？師曰：汝等先歇諸緣，休息萬事，善與不善，世出世間一切諸法，莫記憶，莫緣念，放捨身心，令其自在。心如木石，無所辨別，心無所行，心地若空，惠日自現，如雲開日出相似。但歇一切攀緣，貪瞋愛取，垢淨情盡，對五欲八風，不動不搖，不被見聞覺知所縛，不被諸境所惑，自然具足神通妙用，是解脫人。對一切境，心無亂靜，不攝不散，透過一

切聲色無有滯礙名爲道人云云又曰夫學道人若遇種種苦樂稱意不稱意事心無退屈不念名聞利養衣食不貪功德利益不爲世間諸法之所滯礙無親無愛苦樂平懷麤衣遮寒糲食活命兀兀如愚如聾稍有相應分若于心中廣學知解求福求智皆是生死于理無益却被知解境風之所漂溺還歸生死海裏云云又曰但是三乘教皆治貪瞋等病祇如今念念若有貪瞋等病先須治之不用求覓義句知解知解屬貪貪變成病祇如今但離一切有無諸法亦離于離透過三句外自然與佛無差既自是佛何慮佛不解語祇恐不是佛被有無諸法縛不得自由以理未立先有福智被福智載去如賤使貴不如先立理後有福智云云 會元

馬大師曰道不用修但莫污染何爲污染但有生死心造作趣向皆是污染若欲直會其道平常心是道謂平常心無造作無是非無取捨無斷常無凡無聖經云非凡夫行非賢聖行是菩薩行只如今行住坐臥應機攝物盡是道 傳燈錄

黃檗和尚曰若欲得成佛一切佛法總不用學唯學無求無著八萬四千法門對八萬四千煩惱祇是教化攝引門又曰但隨緣消舊業更莫造新殃

德山和尚上堂若也於己無事則勿妄求妄求而得亦非得也汝但無事於心無心於事則虛而靈空而妙若毛端許言之本末者皆爲自欺何故毫釐繫念三途業因瞥爾情生萬劫羈鎖聖名凡號盡是虛聲殊相劣形皆爲幻色汝欲求之得無累乎及其厭之又成大患終而無益

會元

臨濟和尚曰已起者莫續未起者不要放起便勝爾十年行脚

圓悟禪師曰但一念不生放教玲瓏纔有是非彼我得失勿隨他去乃是終日竟夜親參自家真善知識何憂此事不辦切須自看 心要

雪堂行和尚曰尋常向兄弟說不要上他機境如何謂之機境佛謂之機境法謂之機境而況文章一切雜事乎若守問間地自然虛而靈寂而妙如水上荷蘆子相似蕩蕩地無拘無絆撈著便動捺著便轉真得大自在也 拾遺錄

懶庵和尚示衆云汝等諸人總來就安求覓甚麼若欲作佛汝自是佛而却傍家走忽忽如渴鹿趁陽篋何時得相應去阿彌欲作佛但無如許多顛倒攀緣妄想惡覺垢欲不淨衆生之心則汝便是初心正覺佛更向何處別討

七 學道須要識取先言往行

圓悟禪師曰佛道懸曠久受勤苦乃可得成祖師門下斷臂立雪腰石舂碓擔麥推車事園作飯開田疇施湯茶般土拽磨皆抗志絕俗自強不息圖成功業者乃能之所謂未有一法從懶墮懈怠中生 心要

圓悟禪師曰弟子當痛以死生爲事務消知見解礙徹證佛祖所傳付大因緣勿好名聞退步就實疾行解道德充實愈潛遁而愈不可匿諸聖天龍將推出人爾 心要

黃龍曰未見性人不可安然拱手做無作無修 冥福會要

五祖演和尚曰今時叢林學道之士聲名不揚匪爲人之所信者蓋爲梵行不清白爲人不諦當輒或苟求名聞利養乃廣街其華飾遂被識者所譏故蔽其要妙雖有道德如佛祖聞見疑

而不信矣。爾輩他日若有把茅蓋頭，當以此而自勉。演祖曰：古人樂聞己過，喜於爲善，長於包荒，厚於隱惡，謙以交友，勤以濟衆，不以得喪貳其意，所以光明碩大，照映今昔矣。

嵩嶽元珪禪師曰：以有心爲物，而無心想身。會元

衲子日用用心，幾不過此。

大覺璉和尚曰：禍患藏於隱微，發於所忽。

鴻山和尚曰：舉措看他上流，莫擅隨於庸鄙。

朱世英問晦堂曰：君子不幸，小有過差，而聞見指目之不暇，小人終日造惡，而不以爲然，其故何哉？晦堂曰：君子之德比美玉焉，有瑕生內，必見於外，故見者稱異，不得不指目也。若夫小人者，日用所作，無非過惡，又安用言之。

黃龍南和尚曰：自損者人益，自益者人損，情之得失，豈容易乎。

黃龍曰：聖賢之學，非造次可成，須在積累，積累之要，惟專與勤，屏絕嗜好，行之勿倦，然後擴而充之，可盡天下之妙。

英邵武曰：物暴長者必夭折，功速成者必易壞，不推久長之計，而造卒成之功，皆非遠大之資。昔苗侍者夜坐不睡，以圓木爲枕，小睡則枕轉，覺而復起，安坐如故，率以爲常，或謂用心太過，詰曰：我於般若緣分素薄，若不刻苦勵志，恐爲妄習所率。 禪門寶訓

水庵一和尚曰：昔大愚慈明，谷泉瑯琊，結伴參汾陽，河東苦寒，衆人憚之，惟慈明志在於道，曉

夕不怠，夜坐欲睡，引錐自刺，嘆曰：古人爲生死事大，不食不寢，我何人哉，而縱荒逸，生無益於時，死無聞於後，是自棄也。一旦辭歸，汾陽嘆曰：楚圓今去，吾道東矣。

靈源清和尚曰：先哲言學道悟之爲難，既守行之爲難，今當行時，其難又過於悟守，蓋悟守者，精進堅卓，勉在己躬而已，惟行者，必等心死誓，以損己益他爲任，若心不等，誓不堅，則損益倒置，便墮爲流俗阿師，是宜祇畏。

靈源謂圓悟曰：衲子雖有見道之資，若不深蓄厚養，發用必峻暴，非特無補教門，將恐有招禍辱。

圓悟和尚曰：人誰無過，過而能改，善莫大焉，從上皆稱改過爲賢，不以無過爲美，故人之行，已多有過差，上智下愚，俱所不免，唯智者能改過遷善，而愚者多蔽過飾非，遷善則其德日新，是稱君子，飾過則其惡彌著，斯謂小人，是以聞義能徙，常情所難，見善樂從，賢德所尚，望公相忘於言外可也。

圓悟謂佛鑑曰：白雲師翁動用舉措，必稽往古，晉曰：事不稽古，謂之不法，予多識前言，往行，遂成其志，然非特好古，蓋今人不足法。

白雲端和尚曰：守道安貧，衲子素分，以窮達得喪，移其所守者，未可語道也。

佛鑑勸和尚謂珣佛燈曰：高上之士，不以名位爲榮，達理之人，不爲抑挫所困，其有承恩而効力，見利而輸誠，皆中人以下之所爲。

佛鑑曰：爲道不憂，則操心不遠，處身常逸，則用志不大，古人歷艱難，嘗險阻，然後享終身之安。

蓋事難則志銳，刻苦則慮深，遂能轉禍爲福，轉物爲道，多見學者逐物而忘道，背明而投暗，於是飾己之不能，而欺人以爲智，強人之不逮，而侮人以爲高，以此欺人，而不知有不可欺之先覺，以此掩人，而不知有不可掩之公論，故自智者人愚之，自高者人下之。

佛眼遠和尚曰：林下人發言用事，舉措施爲，先須籌慮，然後行之，勿倉卒暴用，或自不能予決，應須諮詢耆舊，博問先賢，以廣見聞，補其未能，燭其未曉，豈可虛作氣勢，專逞貢高，自彰其醜，苟一行失之于前，雖百善不可得而掩於後矣。

靈源和尚曰：凡人平居，內照多能曉了，及涉事外馳，便乖混融，喪其法體，必欲思紹佛祖之任，啓迪後昆，不可不常自檢責也。

雪堂行和尚曰：學者氣勝，志則爲小人，志勝，氣則爲端人，正士，氣與志齊，爲得道賢聖，有人剛很，不受規諫，氣使然也，端正之士，雖強使爲不善，寧死不二，志使然也。

草堂清和尚曰：燎原之火，生於熒熒，壞山之水，漏於涓涓，夫水之微也，捧土可塞，及其盛也，漂木石，沒丘陵，火之微也，勺水可滅，及其盛也，焦都邑，燔山林，與夫愛溺之水，曠悲之火，曷常異乎。

草堂曰：學者立身，須要正當，勿使人竊議，一涉異論，則終身不可立矣。

晦堂心和和尚曰：稠人廣衆中，賢不肖攝踵，以化門廣大，不容親疎於其間也，惟在少加精選，苟才德合人望者，不可以己之所怒，而疎之，苟見識庸常，衆人所惡者，亦不可以己之所愛，而親之，如此則賢者自進，不肖者自退，叢林安矣。

自得輝和尚曰：大凡衲子，誠而向正，雖愚亦可用，佞懷邪，雖智終爲害，大率林下人，操心不正，雖有才能，而終不可立矣。

簡堂機和尚：清明坦夷，慈惠及物，衲子稍有註誤，蔽護保惜，以成其德，嘗言：人誰無過，在改之爲美。

大惠禪師曰：學道人逐日，但將檢點他人底工夫，常自檢點，道業無有不辨，或喜，或怒，或靜，或鬧，皆是檢點時節。

大惠曰：逆境界易打，順境界難打，逆我意者，只消一箇忍字，定省少時便過了，順境界直是無，懶回避處，如磁石與鐵相遇，彼此不覺合作一處。

八 學道須要辨病中用心 瞻病附

幻住老人曰：身屬報緣，誰無老病，百丈建立，意在於斯，古宿扁延壽堂，爲省行使，其省察行苦，而與悲智，乃有病入易得，生煩惱，健者常懷惻隱心之句，十方聚會，四海同家，旣無親疎貧富之殊，彼病卽己病，人安卽我安，故教中謂看病乃福田中之最勝者也，謂攝養其可罔諸，又曰：或輪次直病，深懷惻隱，密運慈悲，觀彼病緣，如自己受寒溫飢飽，隨量觀察，湯藥所需，時時問候，病者或妄生異見，警起瞋心，徐語應酬，勉其正念，庶自利利他也。

圓悟禪師曰：疾苦在身，宜善攝心，不爲外境所搖，中心亦不起念，常以生死事大，無常迅速爲意，不可斯須恣縱，唯嘆一法，於三業爲大過患，儻有順違，切勿令生，常虛己正心，觀外來觸，如虛舟飄瓦，則物我俱寂，到不動地，爾思之，諦思之。 心要

古德曰：生也猶如著衫，死也還同脫袴，不以生死爲大變，可知矣。 心要

諸苦之中，病苦爲深，作福之中，省病爲最，是故古人以有病爲善知識，曉人以看病爲福田。

緇門警訓、省行堂記

瞻病人五德，四分律云：一知病人可食不可食，二不惡病人便利唾吐，三有慈愍心，不爲衣食，四能經理湯藥，五能爲病人說法，令歡喜已，增長善法，瞻病人六失，增一經云：一不辨良藥，二懈怠，三喜曠好睡，四但貪衣食，五不以法供養，六不共病人言語談笑。 釋氏要覽

緇門寶藏集卷之上終

緇門寶藏集卷之中

九 學道須要辨邪正

勸參禪文云：夫解須圓解，還他明眼宗師，修必圓修，分付叢林道伴，初心薄福，不善親依，見解偏枯，修行癡惰，或高推聖境，孤負己靈，寧知德相神通，不信凡夫悟道，或自恃天真，撥無因果，但向何襟流出，不依地位修行，所以粗解法師不通教眼，虛頭禪客不貴行門，此偏枯之罪也。

緇門警訓

百丈懷海禪師曰：常勸衆人，須懼法塵煩惱，如懼三塗，乃有獨立分，假使有一法過於涅槃者，亦無少許生珍重，此人步步是佛，若執本清淨本，解脫自是佛，自是禪道，解者即屬自然，外道若執因緣修成，證得者即屬因緣外道，執有即屬常見外道，執無即屬斷見外道，執亦有亦無，即屬邊見外道，執非有非無，即屬空見外道，祇如今，但莫作佛見涅槃等見，都無一切有無等見，亦無無見名正見，無一切聞，亦無無聞名正聞，是摧伏外道。 廣燈錄

萬庵顏禪師曰：叢林所至，邪說熾然，乃云戒律不必持，定惠不必習，道德不必修，嗜慾不必去，又引維摩圓覺爲證，贊貪瞋癡殺盜淫爲梵行，烏乎斯言，豈特起叢林今日之害，眞法門萬世之害也，且博地凡夫，貪瞋愛慾，人我無明，念念攀緣，如一鼎之沸，何由清冷，先聖必思大有於此者，遂設戒定惠三學，以制之，庶可廻也，今後生晚進，戒律不持，定惠不習，道德不修，專以博

學強辨搖動流俗牽之莫返予固所謂斯言乃萬世之害也 禪門寶訓

所謂萬世之害乃在今時禪林可見焉

智覺禪師曰近嗟末世誑說一禪只學虛頭全無實解步步行有口口談空自不責業力所牽更教人撥無因果便說飲酒食肉不礙菩提行盜行淫無妨般若生遭王法死陷阿鼻

吾國方法之澆漓宗風陵夷異見競起珍位師席闡化大方者盛唱誑說一禪幻惑後學幾乎百餘年矣已至承虛接響基布天下想夫天魔之屬偷我衣服壞我法之時乎凡措大家族內荒酒色外好畋獵所其施爲多以惡業爲樂不喜爲善是亦富貴叢中常分也是故常愛無因無果之說而不喜說三世業報將謂瞿曇微惡方便適就住持大方龐眉長老竊呈平日狂解長老招之密室開懷印定更引拈提向上若干古則捏合爲證士大夫於是抓著平生痒處抵死不疑善行日弛惡業轉肆不待死陷阿鼻生招一世禍辱可怖可畏佛曰非衆生咎邪師過謬也吁其斯之謂乎

心開貢和尚曰衲子因禪致病者多有病在耳目者以瞪眉努目側耳點頭爲禪有病在口舌者以顛言倒語胡喝亂喝爲禪有病在手足者以進前退後指東劃西爲禪有病在心腹者以窮玄究妙超情離見爲禪據實而論無非是病惟本色宗師明察幾微目擊而知其會不會入門而辨其到不到然後用一錐一箭脫其廉纖攻其搭滯驗其真假定其虛實而不守一方便味乎變通使終蹈於安樂無事之境而後已矣 禪門寶訓

今求受這病底漢子也不可多得祖道下衰可知也

大惠禪師曰近代佛法可傷爲人師者先以奇特玄妙蘊在智襟遞相沿襲口耳傳授以爲宗旨如此之流邪毒入心不可治療古德謂之誘般若人千佛出世不通懺悔 法語

近代專門潛授之禪不出于此蓋且以奇特玄妙遞相傳授尙可矣諸方古則只是淺近博謎子也可笑

無學祖元禪師曰我見日本兄弟一生得悟者不可多矣此國之爲風也只貴智才不求悟解是故設有靈根者博覽內外典籍深嗜巧僞文章不遑自究此事迷中過了一生固爲可憫或有一類稱道人者多是其器量不堪博學強記故以閒坐爲功業而不辨真實向道之心此類亦非今生可開悟者

今已三百餘年往往見此兩般病達人之言信不誣矣嗟乎國風習弊如此其陋矣悲夫無業國師曰如今天下解禪解道如河沙數說佛說心有百千萬億纖塵不去未免輪廻思念不亡盡須沈墜如斯之類尙不能自識業果妄言自利利他自謂上流並他先德但言觸目無非佛事舉足皆是道場原其所習不如一箇五戒十善凡夫觀其發言嫌他二乘十地菩薩且醍醐上味爲世珍奇遇斯等人翻成毒藥

近日禪學之弊以覺識依通爲悟明以穿鑿機緣傳授爲參學以險怪奇語爲提唱以破壞律儀爲解脫以交結貴達資緣據位爲出世方便 中峰廣錄

在往古也偶有此弊在近世也一等如此於戲欲得魔說較退祖道再行亦不可得焉可傷也

大珠惠海禪師大德問太虛能生靈智否真心緣於善惡否貪欲人是道否執是執非人向後心通否觸境生心人有定否住寂寞人有惠否懷傲物人有我否執空執有人有智否尋文取證人苦行求佛人離心求佛人執心是佛人此智稱道否請禪師一一爲說師曰太虛不生靈智真心不緣善惡嗜欲深者機淺是非交爭者未通觸境生心者少定寂寞忘機者惠沈傲物高心者我壯執空執有者皆愚尋文取證者益滯苦行求佛者俱迷離心求佛者外道執心是佛者爲魔大德曰若如是應畢竟無所有師曰畢竟是大德不是畢竟無所有大德踊躍禮謝而去

傳燈錄

真淨文和尚曰其斷見者斷滅卻自心本妙明性一向心外著空滯禪寂常見者不悟一切法空執著世間諸有爲法以爲究竟也 正法眼藏

宗鏡錄曰見緣而不見體即是常見見體而不見緣即是斷見今從因緣而見性則不落常於真性中而緣起則不墮斷名實知見

臨濟大師曰夫出家者須辨得平常真正見解辨佛辨魔辨真辨僞辨凡辨聖若如是辨得名真出家

雖然舊闍開田地一度贏來方始休而今奴郎不分佛魔不辨拍盲休將去自謂此守閒田地此休歇田地也不是真出家只養恬凡夫而已若要死中具眼可始得矣

玄沙備禪師曰有一般坐繩床和尚稱善知識問著便搖身動手點眼吐舌瞪視更有一般說昭昭靈靈靈臺智性能見能聞向五蘊身田裏作主宰恁麼爲善知識大賺人

十 學道須要知學解爲病

臨濟和尚曰今時學人不得蓋爲認名字爲解大策子上抄死老漢語三重五重復子裏不教人見道是玄旨以爲保重

新豐和尚道見祖佛言教如生冤家始有參學分

黃檗和尚曰今時人祇欲得多智多解廣求文義喚作修行不知多智多解釀成壅塞唯知多與兒酥乳喫消與不消都總不知 轉心法要

浮山遠和尚謂道吾真曰學未至於道後耀見聞馳騁機解以口舌辯利相勝者猶如廁屋塗汚丹雘祇增其臭耳

鴻山和尚曰若向外得一知一解將爲禪道且沒交涉名運糞入不名運糞出汗汝心田所以道不是道 會元

十一 學道須要修習坐禪 附坐禪邪正

六祖壇經曰何名坐禪外於一切善惡境界心念不起名爲坐內見自性不動名爲禪何名禪定外離相爲禪內不亂爲定若見諸境心不亂者是真定也

淨名經云即時豁然還得本心

龐居士語錄云心如即是坐境如即是禪如如都不假大道無中邊若能如是解眠時亦不眠天台師靜上座人問曰弟子每當夜坐心念紛飛未明攝伏之方願垂示誨師曰如或夜間安坐心念紛飛却將紛飛之心以究紛飛之處究之無處則紛飛之念何存反究究心則能究之

心安在，又能照之智本空，所緣之境亦寂，寂而非寂者，蓋無能寂之人也。照而非照者，蓋無所照之境也。境智俱寂，心慮安然，外不尋枝，內不住定，二途俱泯，一性怡然，此乃還源之要道也。會元

臨濟禪師曰：倘若取不動清淨境爲是，卽認他無明爲郎主。

這箇說話，多少驚動向椿椿地，做死模樣底漢了。若向這裏覷得透，打得徹，許爾救得一半。臨濟曰：有一般瞎禿子，飽喫飯了，便坐禪觀行，把促念漏不令放起，厭喧求靜，是外道法。祖師云：倘若住心看靜，舉心外照，攝心內澄，凝心入定，如是之流，皆是造作。

今觀初心稱坐禪者，但拘得箇臭皮袋子，浮想妄念起滅不停，與他所謂住心看靜，凝心內澄底，尙未交涉，而況於真圓湛乎。畢竟與狐兔癡坐無異也。

南陽忠國師因僧問坐禪看靜，此復若爲。師曰：不垢不淨，寧用起心而看淨相。

大惠禪師曰：衆生狂亂是病佛，以寂靜波羅蜜藥治之，病去藥存，其病愈甚。

佛心才禪師坐禪儀云：夫坐禪者，端身正意，潔己虛心，疊足跏趺，收視反聽，惺惺不昧，沈掉永離。縱憶事來，盡情拋棄，向靜定處，正念諦觀，知坐是心，及返照是心，知有無中邊內外者，心也。此心虛而知寂，而照圓明了，不墮斷常，靈覺昭昭，揀非虛妄。今見覺家力坐不悟者，病由依計情附偏邪，迷背正因，枉隨止作，不悟之失，其在斯焉。若也斂澄一念，密契無生，智鑑廓然，心華頓發，無邊計執，直下消磨，積劫不明一時豁現，如忘忽記，如病頓瘳，內生歡喜心，自知當作佛，卽知自心外無別佛，然後順悟增修，因修而證，證悟之源是三無別，名爲一解，一行三昧，亦

云無功用道。

仰山和尚曰：若是祖宗門下，上根上智，一聞千悟，得大總持，其有根微智劣，若不安禪靜慮，到這裏總須茫然。

玄沙備禪師曰：饒汝鍊得身心同虛空去，饒汝到精明湛不搖處，不出識陰，古人喚作如急流水，流急不覺，妄爲恬靜，怎麼修行盡出他輪迴際，不得依前披輪迴去。

中峰和尚曰：或有坐在靜默中，於塵勞暫息之頃，忽於陰識中，遽省得箇相似底道理，便乃依約爲是，勾引經教中語言，證過合於心中，不知此病是陰識依通，真生死本，非見性也。

圓覺經云：無礙清淨惠，皆依禪定生。

趙州和尚曰：偏向衣單下坐十年，若不會禪，截取老僧頭去。

古德曰：超凡越聖，必假靜緣，坐脫立亡，須憑定力。

十二 學道須要見性明心

達磨大師謂二祖曰：汝但外息諸緣，內心無喘，心如墻壁，可以入道。二祖作種種說，心說性，不契，一日忽悟，乃曰：可以息諸緣也。達磨曰：莫成斷滅去不。曰：無。達磨曰：子作麼生。二祖曰：了了常知，故言之不可及。達磨曰：此諸佛之所傳心體，更勿疑也。宗門統要

佛告阿難：我常說言，汝身汝心皆是妙明真精，妙心中所現物。云何汝等遺失本妙，圓妙明心，寶明妙性，聚緣內搖，趣外奔逸，昏擾擾相，以爲心性，一迷爲心，決定惑爲色身之內，不知色身外，洎山河虛空大地，咸是妙明真心，中物，譬如澄清百千大海，棄之唯認一浮漚體，目爲全潮。

窮盡瀛渤、切嚴經

二五

異見王問波羅提尊者何者是佛。曰見性是佛。王曰師見性否。曰我見佛性。王曰性在何處。曰性在作用云云。即說偈云。在胎爲身。處世爲人。在眼曰見。在耳曰聞。在鼻辨香。在口談論。在手執提。在足運奔。徧現俱該沙界。收攝在一微塵。識者知是佛性。不識喚作精魂。會元達磨章

潮州大顛和尚曰。夫學道人須識自家本心。將心相示方可見道。多見時輩。只認揚眉動目一語一默。驀頭印可以爲心要。此實未了。吾今爲汝諸人。分明說出。各須聽受。但除卻一切妄運。想念見量。即汝真心。此心與塵境及守認靜默時。全無交涉。卽心是佛。不待修治。何以故。應機隨照。冷冷自用。窮其用處。了不可得。喚作妙用。乃是本心。大須護持。不可容易。傳燈錄

寶塔紹嚴禪師示衆曰。諸仁者。還明心也未。莫不是語言談笑時。凝然杜默時。參尋知識時。道伴商畧時。觀山翫水時。耳目絕對時。是汝心否。如上所解。盡爲魔魅所攝。豈曰明心。更有一類人。離身中妄想。外別認遍十方世界。含日月。包太虛。謂是本來真心。斯亦外道所計。非明心也。諸仁者。要會麼。心無是者。亦無不是者。汝擬執認。其可得乎。會元

真淨和尚曰。佛法至妙無二。但未至於妙。則互有長短。苟至於妙。則悟心之人。如實知自心究竟本來成佛。如實自在。如實安樂。如實解脫。如實清淨。而日用唯用自心。自心變化。把得便用。莫問是之與非。擬心思量。早不是也。不擬心。一天真。一一明妙。一如蓮花不著水。心清淨超於彼。所以迷自心。故作衆生。悟自心。故成佛。而衆生卽佛。佛卽衆生。由迷悟故。有彼此也。

正法眼藏

百丈禪師謂潞山曰。經云。欲識佛性義。當觀時節因緣。時節既至。如迷忽悟。如忘忽憶。方省己物。不從他得。故祖師云。悟了同未悟。無心亦無法。祇是無虛妄。凡聖等心。本來心法。元自備足。汝今既爾。善自護持。會元

僧問仰山。和尚見人問禪問道。便作一圓相。於中書牛字。意在於何。仰山云。這箇也是閒事。忽若會得不從外來。忽若不決定不識。我且問爾。諸方老宿。於爾身上。指出那箇是爾佛性。爲復語底是。默底是。莫是不語不默底。是爲復總。是爲復總不是。爾若認語底。是如盲人摸著象尾。若認默底。是如盲人摸著象耳。若認不語不默底。是如盲人摸著象鼻。若道物物都是。如盲人摸著象四足。若道總不是。拋本象落在空見。如是衆盲所見。只於象上。名遮差別。爾要好切莫摸象。莫道見覺是。亦莫道不是。祖師云。菩提本無樹。明鏡亦無臺。本來無一物。爭得染塵埃。又云。道本無形相。智慧卽是道。作此見解者。是名真般若。明眼人見象。得其全體。如佛見性亦然。碧巖

巖頭和尚示衆云。夫大統綱宗中事。須識句。若不識句。難作個話會。甚麼是句。百不思時。喚作正句。亦云。居頂亦云。得住亦云。歷歷亦云。惺惺亦云。的亦云。佛未生時。亦云。得地亦云。與麼時。將與麼時。等破一切是非。纔與麼。便不與麼。便轉轉地。若也。看不過。纔被人刺著。眼吃瞪地。恰似殺不死底羊。相似。不見古人道。沈昏不好。須轉得始得。正法眼藏

章敬和尚上堂曰。至理亡言。時人不悉。強習他事。以爲功能。不知自性元非塵境。是個微妙大解脫門。所有鑑覺不染不礙。如是光明未曾休廢。曩劫至今。固無變易。猶如日輪遠近斯照。雖

及衆色不與一切和合靈燭妙明非假鍛鍊爲不了故取于物象但如捏目妄起空花徒自疲勞枉經劫數若能返照無第二人舉措施爲不虧實相會元浮山遠公謂演首座曰心爲一身之主萬行之本心不妙悟妄情自生妄情既生見理不明見理不明是非謬亂所以治心須求妙悟悟則神和氣靜容敬色莊妄想情慮皆融爲真心矣以此治心心自靈妙然後導物指迷就不從化

佛曰一切衆生妄認四大爲自身相六塵緣境爲自心相譬彼病目見空中華及第二月故名無明圓覺經

佛曰汝以緣心聽法此法亦緣

佛曰以思惟心測度如來圓覺境界如取螢火燒須彌山

十三 學道須要用話頭工夫爲主

趙州和尚曰兄弟莫久立有事商量無事向衣鉢下坐窮理好

圓通德禪師曰道眼若未明有甚麼用處無事切須尋究

圓悟禪師曰但令心念澄靜紛紛擾擾處正好作工夫

大惠禪師曰工夫熟則撞發關鎖子矣所謂工夫者思量世間塵勞底心回在乾屎橛上令情識不行如土木偶人相似覺得昏但沒巴鼻可把促時便是好消息也

古德曰般若上無虛棄底工夫

大惠禪師曰兄弟做工夫不消舉因緣只去近處看只如六祖爲明上座云汝但善惡都莫思

量當恁麼時一切不思量還我明上座本來面目但恁麼看

大惠曰工夫不可急急則躁動又不可緩緩則昏但矣

圓悟禪師曰他參活句不參死句活句下薦得永劫不忘死句下薦得自救不了若要與祖佛爲師須明取活句心要

高峯妙和尚曰若謂著實參禪決須具足三要第一要有大信根明知此事如靠一座須彌山第二要有大憤志如遇殺父冤讎直欲便與一刀兩段第三要有大疑情如暗地做了一件極事正在欲露未露之時十二時中果能具此三要管取尅日成功不怕甕中走鼈苟闕其一譬如折足之鼎終成廢器高峯錄

高峯曰疑以信爲體悟以疑爲用信有十分疑有十分疑得十分悟得十分高峯錄

草堂侍立晦堂晦堂舉風幡話問草堂堂云迥無入處晦堂云汝見世間貓捕鼠乎雙目瞪視而不瞬四足踞地而不動六根順向首尾一直然後舉無不中誠能心無異緣意絕妄想六窓寂靜端坐默究萬不失一也大惠武庫

大惠禪師曰生死心未破則全體是一團疑情只就疑情窟裏舉個話頭僧問趙州狗子還有佛性也無州曰無行住坐臥不得間斷妄念起時亦不得將心遏捺但只舉此話頭要靜坐纔覺昏沈便抖擻精神舉此話忽地如瞎老婆吹火和眉毛眼睫一時燒了不是差事

大惠曰近世叢林邪法橫生瞎衆生眼者不可勝數若不以古人公案舉覺提撕便如盲人放御手中杖子一步也行不得法語

馮山和尚曰：研窮法理，以悟爲則。

中峯本和尚曰：只向所參話上，一推推住，但拌取生與同生，死與同死，第一不許別求方便，第二不可歸咎於緣境，第三不得瞥起一念感情。廣錄

參禪一著要敵生死，不是說了便休，參禪一著單明大道，朝聞夕死可矣，參禪一著推門落臼，切忌向外馳求，參禪一著要起疑情，大疑必有大悟，參禪一著英靈衲子舉起，便知落處，參禪一著本來面目，經文語錄難載，參禪一著直指人心，貴要自肯承當，參禪一著如敵萬人，怯戰喪身失命，參禪一著如貓捕鼠，不許移睛動眼，參禪一著大丈夫事，非將相所能爲。無門語錄

中峯和尚斥學者只尚言通，不求實悟，常曰：今之參禪不靈驗者，第一無古人真實志氣，第二不把生死無常做一件大事，第三拌捨積功以來所習所重，不下，又不具久遠不退轉身心，畢竟病在於何，其實不識生死根本故也。行錄

高峯和尚曰：兄弟家十年二十年以至一生，絕世忘緣，單明此事，不透脫者，病在於何，本分禪僧試拈出看，莫是宿無靈骨麼？莫是不遇明師麼？莫是一暴十寒麼？莫是根劣志微麼？莫是汨沒塵勞麼？莫是沈空滯寂麼？莫是雜毒入心麼？莫是時節未至麼？莫是不疑言句麼？莫是未得謂得，未證謂證麼？若論膏肓之疾，總不在者裏，既不在者裏，畢竟在甚麼處？咄！三條椽下七尺單前。高峰錄

佛鑑勸禪師曰：每見學道兄弟，有者不求省悟，唯務言說，要會他古人因緣，豈非大錯？他古人只是一期對病施方，隨機發藥，遂有如許多葛藤路門，如標月指頭，敲門瓦子，意只是假扣開

門，因標見月，儘得門開，月現，瓦子指頭，何用之有。

佛鑑曰：參須實參，悟須實悟，研窮教徹底去，不是今日下得一轉語，明日過得一則因緣，古今因緣數若河沙，有甚休歇，畢竟不明心地，如何了達生死？只如達磨初來時，未有許多因緣，爲甚有人悟道云云？又曰：奉勸兄弟，但明心地，莫愁不會因緣，古今因緣也，不道一時不看，但將一則去看，看得透，千則萬則皆同，若道會得這一則，未會那一則，決定未是。普燈錄

大惠禪師曰：千疑萬疑，只是一疑，話頭上疑破，則千疑萬疑一時破。

圓悟禪師曰：直似大死底人，絕氣息，然後蘇醒，始知廓同太虛。心要

瑞鹿本先禪師上堂：大凡參學，未必學問話，是參學，未必學揀話，是參學，未必學代語，是參學，未必學別語，是參學，未必學稔破經論中奇特言語，是參學，未必稔破祖師奇特言語，是參學，若於如是等參學，任爾七通八達，於佛法中儘無見處，喚作乾惠之徒，豈不聞古德道：聰明不敵生死，乾惠豈免苦輪？諸人若也參學，應須真實參學，始得行時行時參取，立時立時參取，坐時坐時參取，眠時眠時參取，語時語時參取，默時默時參取，一切作務時，一切作務時參取，既向如是等時參，且道：參個甚人，參個甚麼語，到這裏須自有個明白處，始得。若不如是，喚作造次之流，則無究了之旨。會元

開善謙禪師曰：時光易過，且緊緊做工夫，別無工夫，但放下便是，只將心識上所有底，一時放下，此是真正徑截工夫，若別有工夫，盡是痴狂外邊走。

黃龍庵主也。祖心勝門曰：告諸禪學，要窮此道，切須自看，無人替代，時中或是看得因緣，自有歡

喜入處卻來入室吐露待爲品評是非深淺如未發明但且歇去道自現前苦苦馳求轉增迷悶此是離言之道要在自肯不由他悟如此發明方名了達無量劫來生死根本若見得離言之道卽見一切聲色言語是非更無別法若不見離言之道便將類會目前差別因緣以爲所得只恐誤認門庭目前光影自不覺知驕成刺語到頭只是自誤枉費心力宜乎晝夜克已精誠行住觀察微細審思別無用心久遠自然有個入路是非朝夕學成事業若也不能如是參詳不如看經持課度此殘生亦自勝如亂生謗法若送老之時敢保成個無事人更無他累其餘入室今去期望兩度卻請訪及 羅湖野錄

緇門寶藏集卷之中終

緇門寶藏集卷之下

十四 學道須要參得直截一路

德山宣鑒禪師出世凡見僧入門便棒

臨濟義玄禪師出世凡見僧入門便喝

大惠示人法語略云但將平昔坐禪處得底看經教處得底語錄上記得底宗師口頭言下領覽得底一時掃向他方世界卻緩緩地子細看他德山何故見僧入門便棒臨濟何故見僧入門便喝若識二大老用處則於日用觸境逢緣處不作世諦流布亦不作佛法理論既不著此二邊須知自有一條活路

祕魔岩和尚常持一木叉每見僧來禮拜卽叉卻頸曰那箇魔魅教汝出家那箇魔魅教汝行脚道得也又下死道不得也又下死速道速道學徒鮮有對者 會元

慈明和尚室中插劍一口以草鞋一對水一盆置在劍邊每見入室卽曰看看有至劍邊擬議者師曰險喪身失命了也便喝出 會元

紫胡和尚山門立一牌牌中有字云紫胡有一狗上取人頭中取人腰下取人腳擬議則喪身失命凡見新到便喝云看狗僧纔回首紫胡便歸方丈 碧巖

佛鑑勲禪師室中以木骰子六隻面面皆書么字僧纔入師擲曰會麼僧擬不擬師卽打出

會元

晦堂心禪師室中常舉拳問僧曰喚作拳頭則觸不喚作拳頭則背喚作甚麼
大惠禪師室中常舉竹篋問僧曰喚作竹篋則觸不喚作竹篋則背不得下語不得無語速道

香嚴和尚示衆曰若論此事如人上樹口銜樹枝腳不蹋枝手不攀枝樹下忽有人問如何是
祖師西來意不對他又違他所問若對他及喪身失命當恁麼時作麼生卽得 會元

芭蕉清禪師示衆曰爾有拄杖子我與爾拄杖子爾無拄杖子我奪爾拄杖子

開善謙禪師曰山僧尋常道行住坐臥決定不是見聞覺知決定不是思量分別決定不是語言問答決定不是試絕卻此四個路頭看若不絕決定不悟此四個路頭若絕僧問趙州狗子還有佛性也無趙州云無如何是佛雲門道乾屎橛管取呵呵大笑 羅湖野錄

楊岐和尚室中問僧栗棘蓬爾作麼生吞金剛圈爾作麼生透

大惠禪師室中問僧不是心不是佛不是物是箇什麼

石頭和尚曰恁麼也不得不恁麼也不得恁麼不恁麼總不得子作麼生

羅山和尚曰會麼不是禪不是道不是佛不是法是甚麼
古德曰此事不可以有心求不可以無心得不可以語言造不可以寂默通大惠曰此是第一等入泥入水老婆說話往往參禪人只恁麼念過殊不知看是甚道理 大惠書

十五 學道須要知入泥入水老婆說話

雲門大師曰古人大有葛藤相爲處祇如雪峰和尚道盡大地是爾夾山和尚道百草頭上薦取老僧闔市裏識取天子洛浦和尚云一塵纔起大地全收一毛頭師子全身總是爾把取翻覆思量看日久歲深自然有個入路

圓悟禪師曰古來大有不惜眉毛爲人指出處雲門觀體全真臨濟坐斷報化佛頭德山無事於心於心無事則虛而靈寂而照巖頭只守閒閒地一切時中無欲無依自然超諸三昧趙州道我見百千個漢子只是覓作佛底中間覓個無心道人難得但熟味其言休心履踐他時異日逢境遇緣乃得力也 心要

魏府老華嚴示衆語曰佛法在爾日用處在爾行住坐臥處喫茶喫飯處語言相問處所作所爲處若舉心動念又卻不是也還會麼爾若會得卽是擔枷帶鎖重罪之人

雪峰存禪師示衆曰一一蓋天蓋地更不說玄說妙亦不說心說性突然獨露如大火聚近之則燎卻面門似太阿劍擬之則喪身失命若也佇思停機則沒干涉 碧巖

雲門大師曰汝若相當去且覓個入路微塵諸佛在爾腳跟下三藏聖教在爾舌頭上不如悟去好

大惠禪師曰如龍得半盞水便能興雲吐霧降霖大雨那裏祇管去大海裏輓謂我有許多水也

大惠曰爾但灰卻心念來看灰來灰去驀然冷灰一粒豆爆在爐外便是沒事人也

大惠曰我這裏無逐日長進底禪遂彈指一下云若會去便罷參 武庫

佛曰：無有定法名阿耨多羅三藐三菩提，亦無有定法如來可說。

臨濟和尚曰：我無一法與人，只是治病解縛。

德山和尚曰：我宗無語句，實無一法與人。

大惠禪師曰：此事若用一毫毛工夫取證，則如人以手撮磨虛空，只益自勞耳。又曰：不容以心意識領會。

臨濟和尚曰：不與物拘，脫體現成。

地藏琛和尚曰：若論佛法，一切現成。

真淨和尚曰：一切現成，更使誰會。

十六 學道須要洞明向上一路

趙州和尚因僧問：狗子還有佛性也？無。州云：無。

趙州因僧問：婆子臺山路向甚處去？婆云：驀直去。僧纔行三五步，婆云：好箇師僧，又恁麼去？後有僧舉似州云：待我去與爾勘過這婆子，明日便去。亦如是問，婆亦如是答。州歸謂衆云：臺山婆子，我與爾勘破了也。

趙州到一庵主處問：有麼？主豎起拳頭，師曰：水淺不是泊船處，便行。又到一庵主處問：有麼？主亦豎起拳頭，師曰：能縱能奪，能殺能活，便作禮。

僧問：清平和尚如何？是大乘，曰：井索。如何？是小乘，曰：錢索。如何？是有漏，曰：箆籬。如何？是無漏，曰：木杓。

南泉和尚因東西兩堂爭貓兒，泉乃提起云：大衆道得，卽救；道不得，卽斬。卻也衆無對，泉遂斬之。晚趙州外歸，泉舉似州云：州乃脫履安頭上而出，泉云：子若在，卽救得貓兒。

洞山和尚因僧問：如何是佛？山云：麻三斤。

雲門大師因僧問：如何是佛？門云：乾屎橛。

楊岐和尚因僧問：如何是佛？岐云：三腳驢子弄蹄行。

僧問趙州：如何是佛？州云：殿裏底。

龐居士問馬祖：不與萬法爲侶，是什麼人？祖云：待爾一口吸盡西江水，卽向汝道。士豁然大悟，作頌云：十方同聚會，箇箇學無爲。此是選佛場，心空及第歸。

僧問巖頭和尚：古帆未挂時如何？師曰：小魚吞大魚。又僧如前問，師曰：後園驢喫草。

大滄安和尚曰：有句無句，如藤倚樹。疎山問：忽遇樹倒藤枯時如何？師呵呵大笑歸方丈。

寶壽和尚開堂曰：三聖推出一僧，師便打。聖曰：與麼爲人，非但瞎卻這僧眼，瞎卻鎮州一城人眼。去在。法眼云：甚麼處是瞎？卻人眼處，師擲下拄杖，便歸方丈。

三聖和尚上堂：我逢人則出，出則不爲人；與化云：我逢人則不出，出則便爲人。

十七 學道須要領會噴地契券

臨濟三度問黃檗佛法的大意，三度被打，遂到大愚問。有過無過，愚曰：黃檗與麼老婆心切，爲汝得徹困，更來這裏問。有過無過，師於言下大悟，乃曰：元來黃檗佛法無多子。

興化到大覺爲院主，一日覺喚院主，我聞爾道向南方行腳，一遺拄杖，頭不曾撥著一個會佛。

法底偏憑個甚麼道理與麼道師便喝覺便打師又喝覺又打師來日從法堂過覺召院主我直下疑爾昨日這兩喝師又喝覺又打師再喝覺又打師曰某甲於三聖師兄處學得個寶主句總被師兄折倒了也願與某甲個安樂法門覺曰這瞎漢來這裏納敗闕脫下衲衣痛打一頓師於言下薦得臨濟先師於黃檗處喫棒底道理

歸靜禪師初參西院便問擬問不問時如何院便打師良久院曰若喚作棒眉鬚墮落師於言下大悟

僧問趙州學人乍入叢林乞師指示州云喫粥了也僧云喫粥了州云洗鉢盂去這僧豁然大悟後來雲門大師拈云且道有指示無指示若言有趙州向他道甚麼若言無這僧爲甚麼去高亭簡禪師參德山隔江纔見便云不審山乃搖扇招之師忽開悟乃橫趨而去更不回頭鳥窠道林禪師因侍者會通禮辭曰某甲爲法出家和尚不垂慈誨今往諸方學佛法去師云若是佛法吾此間亦有少許曰如何是和尙此間佛法師於身上拈起布毛吹之侍者大悟龍潭信禪師一日問天皇曰某自到來不蒙指示心要皇曰自汝到來吾未嘗不指汝心要師曰何處指示皇曰汝擊茶來吾爲汝接汝行食來吾爲汝受汝和南時吾便低首何處不指示心要師低頭良久皇曰見則直下便見擬思卽差師當下開解復問如何保任皇曰任性逍遙隨緣放曠但盡凡心別無聖解

僧問趙州如何是祖師西來意州云庭前柏樹子僧云和尚莫將境示人州云我不將境示人僧云既不將境示人卻如何是祖師西來意州只云庭前柏樹子其僧於言下忽然大悟

維會元等無大悟義今依大惠法語記之

葉縣省和尚因僧請益趙州柏樹子話省曰我不辭與汝說還信麼云和尚重言爭敢不信曰汝還聞簷頭雨滴聲麼其僧豁然不覺失聲曰哪省曰汝見箇甚麼道理僧便以頌對云簷頭雨滴分明灑灑打破乾坤當下心息省忻然

洞山初禪師初參雲門門問近離甚處師曰查渡門曰夏在甚處師曰湖南報慈門曰幾時離彼師曰八月二十五門曰放汝三頓棒師至明日卻上問訊昨日蒙和尚放三頓棒不知過在甚麼處門曰飯袋子江西湖南恁麼去師於言下大悟遂曰他後向無人煙處不著一粒米不種一莖菜攝待十方往來盡與伊抽釘拔楔拈卻炙脂帽子脫卻鶻臭布衫教伊洒洒地作箇無事衲僧豈不快哉門曰偏身如椰子大開得如許大口師便禮拜

嚴陽尊者初參趙州問一物不將來時如何州曰放下著師曰既是一物不將來放下個甚麼州曰放不下擔取去師於言下大悟

歸宗拭眼禪師曾有僧問如何是佛宗云我向汝道汝還信否僧云和尚誠言焉敢不信宗云只汝便是僧問宗語諦審思惟良久曰某便是佛卻如何保任宗曰一翳在目空花亂墜其僧於言下忽然契悟

會元少異今依大惠法語記之僧者芙蓉道訓

法眼嘗參地藏日呈見解說道理藏語之曰佛法不恁麼師曰某甲詞究理絕也藏曰若論佛法一切見成師於言下大悟

香嚴閑禪師遂參馮山山問我聞汝在百丈先師處問一答十問十答百此是汝聰明靈利意

解識想生死根本，父母未生時，試道一句看。師被一問，直得茫然歸寮，將平日看過底文字，從頭要尋一句，耐對，竟不能得，乃自歎曰：畫餅不可充饑云云。一日，交除草木，偶拋瓦礫，擊竹作聲，忽然省悟。

十八 學道須要委悉見地淺深

雲門大師示衆曰：直得乾坤大地，無纖毫過患，猶是轉句不見。一色，始是半提，更須知有全提時節。

雲門曰：法身亦有兩般病，得到法身，爲法執不忘己見，猶存，坐在法身邊，是一直饒透得法身去，放過即不可。子細檢點來，有甚麼氣息，亦是病。大惠曰：而今學實法者，以透過法身爲極致，而雲門返以爲病，不知透過法身了，合作麼生，到這裏，如人飲水，冷煖自知，不著問別人，問別人，則禍事也。

洞山价禪師曰：末法時代，人多乾惠，若要辨真偽，有三種滲漏。一見滲漏，謂機不離位，墮在毒海。明安云：爲見滲，在所知若不轉位，坐在一色，所言滲漏者，只是可中未盡善，須辨來蹤始得。相續玄機妙用，二情滲漏，謂智常向背見處偏枯。明安云：爲情境不圓，滲在取捨前後偏枯。鑑覺不全，是識浪流轉，途中邊岸事，直須句句離二邊，不滲情境。三語滲漏，謂體妙失宗，機昧終始。學者濁智流轉，不出此三種。明安曰：體妙失宗者，滲在語路，句失宗旨，機昧終始者，謂當機暗昧，只在語中，宗旨不圓，句句須是有語中無語，無語中有語，始得妙旨密圓也。

無業國師曰：設有悟理之者，有一知一解，不知是悟中之則，入理之門，便謂永出世利，巡山榜

澗，輕忽上流，致使心漏不盡，理地不明，空到老死無成，虛延歲月，且聰明不能敵業，乾惠未免。苦輪假使才並馬鳴，解齊龍樹，只是一生兩生，不失人身，根思宿淨，聞知卽解。

圓悟禪師曰：大死底人，都無佛法道理，玄妙得失，是非長短，到這裏只恁麼休去。古人謂之平地上死人無數，過得荆棘林，是好事也，須是透過那邊始得。雖然如是，如今人到這般田地，早是難得，或若有依倚，有解會，則沒交涉。詰和尚謂之見不淨潔，五祖先師謂之命根不斷，須是大死一番，卻活始得。浙中永光和尚道：言錄若差鄉關萬里，直須懸崖撒手，自肯承當，絕後再甦，欺君不得，非常之旨，人焉度哉。

古人曰：承言須會宗，勿自立規矩。如今人只管撞將去，便了得，則得，爭奈顛頂備伺，若到作家面前，將三要語，印空印泥，印水驗他，便見方木逗圓，孔無下落處。

圓悟禪師曰：學道之士，初有信向，厭世煩滯，長恐不能得個入路，既逢師指，或因自己直下發明，從本已來，元自具足，妙圓真心，觸境遇緣，自知落著，便乃守住，患不能出得，遂作窠臼，向機境上立照立用，下咄下拍，努眼揚眉，一場特地，更遇本色宗匠，盡與拈卻，如許知解，直下契證，本來無爲無事，無心境界，然後識羞慚，知休歇，一向冥然，諸聖尙覺他起處，不得，況其餘耶，所以巖頭道：他得底人，只守閒閒地，二六時中，無欲無依，可不是安樂法門。

洛浦和尚上堂，末後一句，始到牢關，鎖斷要津，不通凡聖，尋常向諸人道，任從天下樂欣欣，我獨不肯欲知上流之士，不將佛祖言教，貼在額頭上，如龜負圖，自取喪身之兆，鳳縈金網，越霄漢，以何期，直須旨外明宗，莫向言中取則，是以石人機似，汝也解唱巴歌，汝若似石人，雪曲也。

應和 會元

白雲端和尚曰：直須悟始得，悟後更須遇人始得。爾道既悟了便休，又何必更須遇人？若悟了遇人底，當垂手方便之時，著著自有出身之路，不瞎卻學者眼。若祇悟得乾蘿蔔頭底，不唯瞎卻學者眼，兼自己動便先自犯鋒傷手。 會元

五祖演和尚道：有一般人參禪，如琉璃瓶裏搗糝糕相似，更動轉不得，抖擻不出，觸著便破。若要活潑潑地，但參皮殼漏子禪，直向高山上撲將下來，亦不破亦不壞。 碧巖

晦堂和尚示衆云：若也單明自己，不悟目前此人，有眼無足；若悟目前不明自己，此人，有足無眼。據此二人，十二時中，常有一物蘊在胸中，物既在胸，不安之相，常在目前。既在目前，觸途成滯，作麼生得平穩去？祖不言乎？執之失度，必入邪路，放之自然體無去住。 正法眼藏

葉縣省和尚云：參學須具參學眼，見地須得見地句，有時句到意不到，妄緣前塵，分別影事，有時意到句不到，如盲摸象，各說異端，有時意句俱到，打破虛空界，光明照十方，有時意句俱不到，無目之人縱橫走，忽然不覺落深坑。 會元

玄沙備禪師疾大法難舉，罕遇上根學者，依語生解，隨照失宗。迺示綱宗三句曰：第一句，且自承當現成具足，盡十方世界更無他故，祇是仁者更教誰見？誰聞都來是汝心王所爲，全成不動智，只缺自承當，喚作開方便門，使汝信有一分真常流注，亘古亘今，未有不是，未有非者。然此句只成平等法，何以故？但是以言遣言，以理逐理，平常性相，攝物利生耳，且於宗旨猶是明前不明後，號爲一味平實分證法身之量，未有出格之句，死在句下，未有自由分，若知出格

量，不被心魔所使，入到手中，便轉換落落地，言通大道，不墮平懷之見，是謂第一句綱宗也。第二句，廻因就果，不著平常一如之理，方便喚作轉位投機，生殺自在，縱奪隨宜，出生入死，廣利一切，遍脫色欲愛見之境，方便喚作頓超三界之佛性，此名二理雙明，二義齊照，不被二邊之所動，妙用現前，是謂第二句綱宗也。第三句，知有大智性相之本，通其過量之見，明陰洞陽，廓周法界，一真體性，大用現前，應化無方，全用全不用，全生全不生，方便喚作慈定之門，是謂第三句綱宗也。

十九 學道須要識在得底人，不必嫌知解。

遠錄公云：未透底人參句，不如參意，透得底人參意，不如參句。 碧巖

黃龍心禪師大悟之後，從容游泳陸沈衆中，時時往決雲門語句。南公曰：知是般事便休，汝用許多工夫作麼？公曰：不然，但有纖疑在，不到無學，安能七縱八橫，天廻地轉哉？南公肯之。 僧寶傳

圓悟禪師曰：久參先德，有見而未透，透而未明，謂之請益。若是見得透，請益卻要語句上周旋，無有凝滯，久參請益與賊過梯。 碧巖

歸宗和尚曰：從上古德，不是無知解，他高尚之士不同常流，今時不能自成立，虛度時光，湧泉云：見解言語總要知通，若識不盡，敢道輪廻去在，爲何如此？蓋爲識漏未盡，汝但盡卻今時始得成立。 會元

大惠禪師曰：從上大智慧之士，莫不皆以知解爲僑侶，以知解爲方便，於知解上行平等慈，於

知解上作諸佛事，如龍得水，似虎靠山，終不以此爲惱，只爲他識得知解起處。宗鏡錄云：若以智惠爲非，則大智文殊不應稱法王之子，若以多聞是過，則無聞比丘不合作地獄之人，應須以智惠合其多聞，終不執詮而認指，以多聞而廣其智惠，免成孤陋而面墮。所以云：有智無行國之師，有行無智國之用，有智有行國之寶，無智無行國之賊，是以智應須學，行應須修，闕智則爲道之譬，無行乃國之賊，當知名相關鎖，非智鑰而難開，情想勾牽非惠刀而莫斷。

二十 學道須要辨賓主句

臨濟和尚曰：參學之人，大須子細，如主客相見，便有言論往來，或應物現形，或全體作用，或把機權喜怒，或現半身，或乘獅子，或乘象王，如有真正學人，便喝先拈出一箇膠盆子，善知識不辨是境，便上他境上，作模作樣，學人便喝，前人不肯放，此是膏肓之病，不堪醫，喚作客看主，或是善知識，不拈出物，隨學人門處，即奪，學人被奪，抵死不放，此是主看客，或有學人，應一個清淨境，出善知識前，善知識辨得是境，把得拋向坑裏，學人言：大好善知識，卽云：咄哉，不識好惡，學人便禮拜，此喚作主看主，或有學人被枷帶鎖，出善知識前，善知識更與安一重枷鎖，學人歡喜彼此不辨，呼爲客看客。

首山念和尚示衆曰：諸上座，不得盲喝亂喝，尋常向汝道，賓則始終賓，主則始終主，賓無二賓，主無二主，若有二賓二主，兩箇卽成瞎漢，所以我若立，爾須坐，我若坐，爾須立，坐則共備坐，立則共備立，雖然如是，急著眼始得。

二十一 學道須要辨履踐工夫

唐宣宗皇帝問弘辨禪師曰：何爲頓見，何爲漸修，對曰：頓明自性，與佛同儔，然有無始染習故，假漸修對治，令順性起用，如人喫飯，不一口卽飽。

馮山和尚上堂，夫道人之心，質直無偽，無背無面，無詐安心，一切時中，視聽尋常，更無委曲，亦不閉眼塞耳，但情不附物，卽得從上諸聖，祇說濁邊過患，若無如許多惡覺，情見想習之事，譬如秋水澄淨，清淨無爲，澄淨無礙，喚他作道人，亦名無事人，時有僧問：頓悟之人，更有修否，師曰：若真悟得本，他自知時，修與不修，是兩頭語，如今初心，雖從緣得，一念頓悟自理，猶有無始曠劫習氣，未能頓淨，須教渠淨除現業流識，卽是修也，不可別有法教渠修行趣向，從聞入理，聞理深妙，心自圓明，不居惑地，縱有百千妙義，抑揚當時，此乃得坐被衣，自解作活計，始得，以要言之，則實際理地，不受一塵，萬行門中，不捨一法，若也單刀直入，則凡聖情盡，體露真常，理事不二，卽如如佛。會元

達磨大師告二祖曰：正法眼藏，我今付汝，吾滅後二百年，衣止不傳，法周沙界，明道者多，行道者少，說理者多，通理者少，酒符密證，千萬有餘，汝當闡揚，勿輕未悟，一念迴機，便同本得。大珠和尚僧問：如何是修行，師曰：但莫污染自性，卽是修行，莫自欺誑，卽是修行，大用現前，卽是無等等法身。傳燈錄

湧泉欣禪師上堂：我四十九年，在這裏，尙自有時走作，汝等諸人，莫開大口，見解人多，行解人萬中無一箇，見解言語總要知通，若識不盡，敢道輪迴去在，爲何如此，蓋爲識漏未盡，汝但盡

卻今時始得成立。會元

大惠禪師曰：此事極不容易，須生慚愧始得。往往利根上智者得之不費力，遂生容易心，便不修行，多被目前境界奪將去，作主宰不得。日久月深，迷而不返，道力不能勝業力，魔得其便，定為魔所攝持，臨命終時亦不得力。

圓悟禪師曰：如人學射，久久方中，悟則剎那，履踐工夫須資長遠，如鴉鳩兒出生下來，赤骨體地養來，餓去，日久時深，羽毛既就，便解高飛遠舉，所以悟明透徹，政要調伏。心要

圓悟曰：理須頓悟，事要漸修。心要

南泉云：我十八上解作活計，趙州道我十八上解破家散宅，又道我在南方二十年，除粥飯二時是雜用心處。

洞山价禪師曰：直須心心不觸物，步步無處所，常不間斷，稍得相應。得燈錄

大慈寰中禪師曰：說得一丈，不如行取一尺；說得一尺，不如行取一寸。洞山又云：說取行不得底，不如行取說不得底。

晦堂心和尚曰：予初入道，自恃甚易，遂見黃龍先師，後退思日用與理矛盾者極多，遂力行之。三年，雖那寒溽暑，確志不移，然後方得事事如理。而今咳嗽掉臂，也是祖師西來意。禪門實訓

香林遠禪師嘗云：老僧四十年，方打成一片。

圓悟舉此語，教得底人，勸履踐工夫，真有旨哉。

圭峯禪師曰：真理即悟而頓圓，妄情息之而漸盡，頓圓如初生孩子，一日而肢體已全，漸修如

長養成，人多年而志氣方立。會元

圭峯又：山南溫造尚書問悟理息妄之人，不結業，一期壽終之後，靈性何依？師曰：一切衆生，無不具有覺性，靈明空寂，與佛無殊，但以無始劫來，未曾了悟，妄執身為我相，故生愛惡等情，隨情造業，隨業受報，生老病死，長劫輪迴，然身中覺性未曾生死，如夢被驅役，而身本安閑，如水作冰，而濕性不易，若能悟此性，即是法身，本自無生，何有依託？靈靈不昧，了了常知，無所從來，亦無所去，然多生妄執，習以性成，喜怒哀樂，微細流注，真理雖然頓達，此情難以卒除，須長覺察，損之又損，如風頓止，波浪漸停，豈可一生所修，便同諸佛？力用，但可以空寂為自體，勿認色身，以靈知為自心，勿認妄念，妄念若起，都不隨之，即臨命終時，自然業不能繫，雖有中陰，所向自由，天上人間，隨意寄託，若愛惡之念已泯，即不受分段之身，自能易短為長，易蠢為妙，若微細流注，一切寂滅，唯圓覺大智，朗然獨存，即隨機應現，千百億化身，度有緣衆生，名之為佛，謹對。

圓悟和尚曰：古之有道宿德，令人既脫根塵，當弘密印，三二十年，做冷寂地工夫，纔有纖毫知見，解路隨即掃擯，亦不留掃擯之迹，撒手那邊，全身放下，硬糾糾地得大快活，唯恐知有如是作略，知則禍事也。心要

嫩安和尚云：安在瀉山三十年來，喫瀉山飯，屙瀉山屎，不學瀉山禪，只看一頭水牯牛，若落路入草，便牽出，若犯人苗稼，即鞭撻調伏，既久，可憐生，受人言語，如今變作箇露地白牛，常在面前，終日露迥迥地，趁亦不去也。正法眼藏

圓悟和尚曰：既得旨之後，綿綿相續管帶，令無間斷，長養聖胎，縱逢境界惡緣，能以正知見定力融攝之，使成一片，則生死大變，不足動自己胸次，養得歲深，成個無爲無事大解脫人，豈不是能事已辦，行腳事畢耶？心要

興善惟寬禪師，憲宗詔至闕下，侍郎白居易嘗問曰：既曰禪師，何以說法？師曰：無上菩提者，被於身爲律，說於口爲法，行於心爲禪。應用者三，其致一也。譬如江湖淮漢，在處立名，名雖不一，水性無二，律卽是法，法不離禪。云何於中妄起分別？曰：既無分別，何以修心？師曰：心本無損傷，云何要修理？無論垢與淨，一切勿念起。曰：垢卽不可念，淨無念可乎？師曰：如人眼睛上一物不可住，金屑雖珍寶，在眼亦爲病。曰：無修無念，又何異凡夫邪？師曰：凡夫無明，二乘執著，離此二病，是曰真修。真修者不得勤，不得忘，勤卽近執著，忘卽落無明，此爲心要云爾。會元

潯山和尚問仰山曰：寂子，爾心識微細流注，無來幾年耶？仰山未卽答，卻問和尚無來幾年，其時潯山自是七十餘歲，謂仰山曰：老僧無來已七年矣。寂子何如？仰山云：惠寂正闍在，以此觀之，這裏使靈心說脫空，相瞞得麼？真有大力量始得。大惠普說

二十二 學道須要到得大休歇田地

斯集成焉。至大休歇田地，不著編類者久矣。一日有僧問曰：庵主作斯集，可謂便於初學觀覽。然至大休歇一門，不著編排，何也？予曰：我不知，我不會。僧曰：庵主爲什麼？語未終，予拍手呵呵笑。其僧茫然，仍作山中四威儀偈，聊陳志云：山中行赤腳，尖頭鳥道平。逢著大蟲觸牙爪，歸來杖子暗相驚。山中住，只識從朝又到暮。客來若問因什麼，萬岳千峯努力怒。山中坐，靠取須彌

那一座，不是倦禪學。駱駝時把衲衣，欲補破。山中臥，飽餉地，消一箇。默耀韜輝付枕兒，幸然無人求滯貨。

緇門寶藏集卷之下終

古德曰多識前言往行遂成其志一絲先師曾隱丹山宴寂之餘閱華竺墳典拾便言行者而輯錄為編目之曰緇門寶藏總得三卷二十二章始以決信心怕生死而為本終以勤履踐到休歇而為極在其中間者擇師簡友之要見性明心之理以至向上末後邪正賓主之句剖列部類靡不該載間加評論而折衷之學者往往襲藏如獲夜光余竊觀之魯魚豕亥相誤甚夥客歲之冬參考本書大概訂正傍加優點以便初學之觀覽尙恐訛舛不鮮今將鏤梓傳諸不朽以為後進之鑑也讀者儻能順言遵行則遂成其大志者必矣決矣若夫宿有靈骨具超宗異目亦不成剩語

寬文龍集癸丑正月穀旦

永源小比丘惠詢謹跋

大正九年一月二十日印刷
大正九年一月廿三日發行

【國譯禪宗叢書】 第四卷

編輯者兼

東京市神田區錦町一丁目十六番地
國譯禪宗叢書刊行會

右代表者

宮下軍平

印刷者

東京市神田區錦町三丁目一番地
中島藤太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目一番地
神田印刷所

著作權所有

((非賣品))

發行所

東京市神田區錦町一丁目十六番地(二松堂書店內)

國譯禪宗叢書刊行會

電話神田二四七八番
振替東京四六〇一六番

發行所

東京市丸の内區

丸の内區丸の内三丁目

東京市丸の内區

丸の内區丸の内三丁目

東京市丸の内區丸の内三丁目

東京市丸の内區丸の内三丁目

東京市丸の内區丸の内三丁目

東京市丸の内區丸の内三丁目

379
12

終

